

## 序

大勢の兄弟の中に育ち、青春も希望も叶わぬ世に生きた私でしたが、我が子にだけは「思いっきり好きな道を歩ませてやりたい」と、そんな思いは消えませんでした。

三人の子供を与えられ、幸せでした。息子の受験、どんなに好きな道であっても、息子は息子なりに、悩み苦しんだことでしょう。共に歩んだ私も、時には脱落しそうになりながら、やはり我が子のあの誕生の喜びを忘れることは出来ませんでした。そして「母の愛」を貫きたいと堅く誓いました。その息子は幸運にも念願の留学に恵まれ、アメリカ航空宇宙局（ジョンソン宇宙センター）に三年、研究員として勤め、今もなおブラウン大学で研究をしています。そして「お母さん、どこまでも許してくれてありがとう」と、はるかアメリカから声の便りをくれます。

今更のように、母として「信じて許す愛」の素晴らしさを知りました。その息子も、やがて二児の父となります。こんな体験が、どこかの悩める少年に、いささかの灯火（ともしび）ともなればと、祈りを込めてしたためました。そして命がけで我が子を信じ、愛し抜いた小さな母のあったことを思い出して下さい、と陰ながら念じています。

1997年12月

広井 ふじ子

昭和 53 年

6 月 21 日 水曜日（雨）

今朝は雨が降っている。孝ちゃんはわりと静かに出かけていく。どうかいら立たないようにと私は祈る。

6 月 23 日 金曜日（雨）

今朝は雨が音を立てて降っている。孝ちゃんは傘を持っていくのが、おっくうのようである。でも梅雨の事だから、それは当然だろう。朝、いつものように 6 時 15 分、きちんと出かけて行く。孝ちゃん、来春の大学入試パスさせてやりたいものである。「孝ちゃん、頑張って」と、心の中で叫ぶ。

張り切ったあの子ではあるが、神のお守りがなくては自信が出来ない。とても可愛い息子だもの。あの生まれて以来の、おとなしい静かだった孝ちゃん。あの頃の孝ちゃんは親孝行だった。今でも、口では悪く言うけれど、胸の中を透かせば、やはり我が子は我が子。血肉を分けた可愛い孝ちゃんである。「気をつけて行きなさい」と心の中で言う。これからの厳しい道を、あなたは真っしぐらに進むのです。そして、いつか明るく楽しい希望に燃えた太陽のあることを、いつも心に描きながら一步一步行くのです。私は、あなたのその素晴らしい姿を、必ずこの目で見れる日を静かに待ちます。私の傍らにいてくれたあなたの面影を、いつまでも忘れないと思います。たくさん思い出を作っておくのもいいでしょう。母と子として暮らす日に、固いきずなを残しておくといいでしょう。男の子です。それでいいのです。

6 月 24 日 土曜日（曇一時雨）

孝ちゃんは今、眠っているのかな。それとも勉強しているかしら。あの子はいつも前向きで生きている。小言を言うときはあるが、でも真は優しい、いい子である。可愛か

った幼い頃を思い浮かべる時、とても叱ってやることは出来ない。男の子として生まれながら、あまり手をかけてやる事が出来なかった。共に泣いた夜もあった。夏の夜空の下、子守歌を歌って、おんぶして歩いた時の思い出。元気で育って欲しいと願いを込めて働いた毎日。あの頃の懐かしい思い出が蘇る。孝ちゃん、自分のやりたい事、今やれるときが来たのですよ。頑張ってやりなさい。私は、あなたが可愛いのです。

7月10日 月曜日（曇）

いつもだけど、眠くてどうにもつらい。だけど、毎朝こうして孝ちゃんのために、私は起きてやらなければならない。孝ちゃんを送りだすと、とたんに目が重くて、寝たい気持ちになる。でも頑張っている孝ちゃんのために、大切な息子の為に、母として私はへこたれてはならない。たとえ仕事を持つ身でも、可愛い息子の事ならしてやりたい。たとえ口答えばかりしたとしても、また、反抗するあの子の姿も、私には心のいら立ちに過ぎないと思って、許すことが出来る。小さい時、何もしてやれなかった。本当に可哀そうだった。いつも心の中で、「大きくなったら好きなようにしてやるよ」と言っていた。今、大きくなって、とてもうれしいけれど、小言も多くなり、耐えられない時もある。荒れて荒れてどうにもならない時、私は孝ちゃんのその姿を眺め、あの子の中に宿る本当の可愛かった昔の姿を、そして優しい心を持っている事を確かめたかった。どんな事があっても、我が子として愛していきたいと。たまらなく悲しくなる時も、どうしてもあの子を信じていくべく自分の胸に言い聞かせている。母としての人生に光り輝く素晴らしい未来のあることを夢見て、今日も一日頑張ろう。

8月8日 火曜日（曇時々雨）

今日は久しぶりに雨が降った。来る8月13,14日の二日間、お盆踊りが行われる。けいこも、私は行く気になれない。孝ちゃんの進学のこと頭がいっぱいだ。今夜8時頃、自転車どこからか帰ってきた。それは先生の家へ行ってきたらしい。私は先生の家などよく行ったものだと思った。でも良いことだと安心した。そして、ご飯にカレーを作

ったので、つけてやる。機嫌良く「二階へ持って行って食べる」と階段を上っていった。分からない問題を聞きに行ったのかなと思った。先生もよくして下さったのだなと私は思った。勉強勉強で頑張っているのだから、どうかこのままいじけないで真っすぐにいって欲しいと思う。皆様のお陰だと思った。今、9時15分。まだ盆踊りの音が響いてくる。孝ちゃんは、うるさがるかもしれないが、でも、これも我慢しなければいけないよ、孝ちゃん。もう半年で東京へ行けば、こんな故郷のことが懐かしく思う時もあると思うよ。

8月20日 日曜日（曇）

この2、3日、朝夕めっきり秋らしく涼しい。今朝、孝ちゃんは模試だといって学校へ行った。やはり一番の汽車で出かけるあの子の虫がどうしても直らない。でもいい。頑張っているのだから何も言うまい。朝、猫をかまってニコニコしていた。この前から、もらった猫がいる。真っ黒の猫である。生まれて1ヵ月くらいたったのだという。でも、あんな孝ちゃんでもなぜか猫は好きらしい。牛乳を飲んでると、猫が欲しそうにした。「欲しいか」と言って、お皿に牛乳を入れてやっていた。本当は、やはり優しい心の持ち主なのだと安心した。何でもいい。心が柔らかくなることがあれば、その方がいい。いくら受験だといっても、あまり張り詰めていては体に悪い。このくらいのほうが人間味があっていいと思う。でも少しの時間でも、心を休めてくれるといい。そして、今に来る大きな壁に勢いよくぶつかってくれる事を祈る。人間として生きたことを、心から喜ぶ時がくるといい。あの子にも人生最大の出来事と言えよう。神に祈り、毎日を信じて生きよう。母として私は我が子を悲しませたくない。どうしても成就させてやりたい。

9月25日 月曜日（晴）

昨日、孝ちゃんは南山大学へ行って試験を受けてきた。夜7時少し過ぎに戻って来た。さぞ疲れたであろう。頑張っている孝ちゃんに何も言わず、私はただ見つめていてやるだけより仕方がないのである。男の道を一生懸命生きてくれればそれでいい。何も言うこ

とはないと私は心に言い聞かせた。猫のことはとても可愛いらしく、私にいろいろと注文をつけている。「ご飯をやれ」とか「危ない」とか、私は猫が来てから急に忙しくなった。でも、孝ちゃんの気がゆうになったから何より嬉しい。猫にでもいい。あの優しかった小さいころの孝ちゃんに戻ってほしい。本当のあの子の心を見せて欲しいと思っていた。でも、猫がいると会話がある。愛情がある。とても人間らしく感ずる。これでいい。勉強ばかりじゃない。人間として温かいあの子の心を表してくれる事が、何より私にとって嬉しい。「孝ちゃん、ありがとう」と、私は心の中で言った。温かい人間になって欲しいと願っていた。それが今、ほのかに育っているようである。私のおなかにいた可愛い息子だもの。必ずいい子になると信じていたけれど、このまま真っすぐに伸びて欲しい。いがまないように、正しくいって欲しい。東京に行ってから、こんなお母さんの願いを忘れないでほしい。今、午後 3 時 40 分、外はとてもいい秋晴れである。昨日、孝ちゃんの運動靴が新しくなった。真っ白の靴である。さぞ気持ちがいいであろう。

9月27日 水曜日（曇）

今朝から何だか小寒くて、空も雲が張って日中でも暖かくなりそうもない。やはり夕方まで、あまり日が照るといこともなく、どんよりしていた。夜、孝ちゃんはなかなか学校から戻ってこない。私は心配になった。それは汽車だから、一本遅れると一時間くらい後になるとは聞いてはいたが、7時40分になっても孝ちゃんは帰ってこない。私は気になって、車庫へ行って外を見ていた。こんなに暗くなったのに、まだこない。道も暗いから危ないであろう。いろいろ心配は募るばかり。いくら普段、口答えばかりしていても、いざこうして遅くなって、もしもの事があつたらと思うと、たまらない。やはり可愛かった小さいころの事、また、大きくなっても頑張つて勉強しているあの子の心の中を思う時、とても可愛くて見上げる程の背丈になった孝ちゃんを、私はいつまでも見守つてやりたいと思った。

電話が「ジーッ」と鳴る。一瞬ドキッとした。でも良かった。お客様の予約だった。まずまずと胸をなで下ろした。どうしてこんなに心配なんだろう。私はいつになっても

安心できない性分である。まだ車庫に出る。そして暗い道を見つめていた。すると白いカッターシャツらしいものが見えてきた。孝ちゃんらしい。やや安心した。やはり孝ちゃんだった。

良かった。本当に良かった。何でもいい。帰ってくれば、それでいいのだと心が楽になった。でも孝ちゃんは帰るなり、大声で小言を言った。私がそこにいるのが面白くないようである。「そこ閉めといて。早く!」と、わめく。また始まったようである。学校か帰りの汽車の中で、面白くないことがあったに違いない。そういう時、いつもこうである。家へ着くと、思い切り言いたいことを吐き出すのである。でもいい。こんな時、母親だもの、聞いてやればいい。たとえ、しゃくにさわる事を言っても、私のこのおなかで育った可愛い子供だもの。何を言っても我慢しよう。可愛かった小さい頃を思い出して、心をすっきりさせよう。元気でさえあれば、それでいい。何でもいいから受験に備えて私に吐き出す事は吐き出したらいい。とにかく健康でいてくれれば、それでいい。あと半年、どんな事があっても我慢してやろう。いつか、あの子も分かるだろう。母としての私のこの気持ちを、そして懐かしい故郷の思い出をしみじみ思い、涙する時もあるだろう。それでいい。風邪をひかないように、歯も大切にしたい。東京へ行ったら、歯医者へ行くことも出来ないだろう。自分の体をいたわって無事、東京へ旅立つ事が出来れば本当に嬉しいと思う。合格、合格。今はそれだけを切に祈る。口答えなどいくらでも言うがいい。前向きに頑張るのですね。今、10時2、3分を少し過ぎている。一日は早いものである。そして月日も、このように早く過ぎていくのでは. . .。

10月6日 金曜日(晴)

孝ちゃんは今朝、機嫌よく出て行った。まあ良かった。よく眠れたのかな。とにかく体が大事だから、いくら受験といっても体をこわしては大変。適当にやってくれればいいが、毎朝のご先祖様への祈願も、つい真剣になる。とにかく孝ちゃんは男である。何とか願いを叶えてやりたい。本当に孝ちゃんは、優しい心の持ち主である。今、大きくなって少しカライバリしているが、私は、そんなことよく知っている。今のうち、たくさん言いたいこと、したいことはやっておくといいと思う。東京へ行けば一人で寂しい

であろう。猫一匹いないのだから。今は猫の「鈴子」をよく可愛がっている。そんな心なら私は安心だ。東京に出れば、いろいろ苦勞も待ち受けているだろう。どうかそんな事を乗り切って立派になって下さい、と心から祈る。大切な大切な私の息子だけど、でも世の中に送ろう。そして日本の国のために尽くす、良い人間になってくれる事を望む。自分のしたいことは何でもしなさいと、心で言った。大きく羽を広げて成長してくれたら、私はそれで嬉しい。どんなに寂しくても、じっと待とう。いつか私の前に立派な姿を現してくれる日もあろう。そんな夢を見て私は生きていきます。挫折など考えたくない。強い信念を持って出発してくれる事を、どこまでも信じます。

母として、あの誕生の瞬間のあの喜びを、今でも忘れません。この子は素晴らしい子と信じ、今日まで育ててきた。育ててくれた。ありがたいと思う。これからも今までの孝ちゃんの優しい心と、強い信念とで、世の中に羽ばたくことを期待する。自分の持つ才能をうんと生かして、人の為にくす、そんな人になって欲しい。自分の欲はいけない事、自分を捨てる事である。何とか伝えたい。こんな気持ちを、母としての子供への愛情を。どうか真っすぐに伝わることを願う。少しは苦勞するであろう。東京に出れば、確かに平穩な道ばかりではなかろう。そんな時、こんな母の気持ちを何とか無線によって伝えて欲しい。ただ私は我が子の無事を祈る。くじけないよう、転ばないように伸びてくれることを、どこまでも祈ってやまない。

10月9日 月曜日（晴）

今朝はとても起きづらかった。昨夜も遅く寝たせいか、眠くて仕方がない。でも、頑張って起きることが出来た。少し遅かったので、孝ちゃんは小言を言った。フライやカツを揚げていたので、時間を見るのが遅かったのである。でも、どうにか間に合ったらいい。毎朝、私は眠くてつらい。でも、母親としてもう少しのことだから頑張ろう。昨夜、孝ちゃんが、私立大学は早稲田と上智と東京理科大と言っていた。何でも高いところを受けておくと、行かないにしても良いことだと私は思った。今日も一日、孝ちゃんも皆無事で過ごせますように、ただ祈るばかりである。なんととっても体が第一。今日も、とても忙しそうである。

10月12日 木曜日（晴）

今朝はとても小寒かった。昨夜2時25分に寝たから、よけい体が疲れて眠く、そのせいか寒くて仕方がなかった。でも5時にご飯のスイッチをつけた。そしてカツとエビフライを揚げた。本当に子供が一人前になるまでは大変なことだと思った。でも、どうしても孝ちゃんだけは大きな希望を叶えてやりたい。どんな事をしてでもやってやりたい。自分に着物が欲しいと思っても、そんな思いを風に吹き飛ばさなくてはならない。孝ちゃんの為と、心をしっかり決めて我慢しなくてはいけない。あの子の為に、たくさんお金をためておかねば東京に出ても可哀そうである。大いに青春を羽ばたくために、自分の体なんか構ってはいられない。どうか素晴らしい神のお恵みがありますように。「東大合格」。絶対の信念を持って、こう叫びたい。悲しみなんか考えたくない。とにかく、合格なのだ。私は、これしか頭にない。とても高い階段だけど、でも孝ちゃんはきっとあの根性で上りきってくれるだろう。そして、この郷土の為、すばらしい錦の御旗を飾ってくれるだろう。

母校の恩、郷土の人々への感謝。皆、忘れることなく、この土地を離れるとき、この方々へのご恩に報いるべく、固い決意を持って旅立って欲しい。日本の国の宝となるような素晴らしい人間になるよう、私は祈り続けたい。「孝ちゃん、頑張って夢を実現しなさい」。私は母として今、この言葉を贈りたい。それぞれの持つ夢に向かって進む。こんな素晴らしいことがあるだろうか。あなたは幸せなのです。本当にそうなのです。

10月24日 火曜日（曇）

今朝、孝ちゃんはあまり口答えはしなかった。少し疲れているみたいに見えた。寝足りないのではないかと思う。よく寝ないと、体がえらくなるのではないかと心配になる。どうしても今年いっぱい頑張らなくてはならない。孝ちゃん、よく寝て、そしてやる時はやればいい。お母さんはそう思う。自分の立てた希望をどこまでも貫くのです。男と生まれたからには、男らしく人生に挑戦しなさい。そんな人生も素晴らしいと



思います。大きな光を目指して進むのです。あなたなら出来ます。とても可愛かった小さいころのあなた。忘れられない数々の出来事。それもあと少しの月日を残して、あなたは去っていくのです。そんな日が必ず来ます。

でもそんな時、私は涙なんか見せません。喜んであなたを送りだします。この手の中ではしゃいだ幼いころの姿。今も目の前に浮かびます。よく大きくなってくれたと思います。何不自由ない体を与えて頂いて、この上ない幸せです。そして私を「お母ちゃん」と呼んでくれる、そんな人並みの母になれた幸せを今、かみしめています。これからの一日一日を、母と子として大切に歩みたいと思います。輝くばかりの子供になってくれました。大きな望みを抱いて頑張っていてくれる、素晴らしい子供よ。大きくなって下さい。お母さんのことなど思わず、どこでも好きな所で一生懸命励んで下さい。この蘇原に生まれた、この故郷を忘れず、いつまでもあらゆる皆様のご恩をしっかり胸に留め、正しい人間になってくれる事を私は祈っています。

11月9日 木曜日（晴）

今日は風がやや強く、秋の終わりを告げるかのように思われる。朝起きるのがだんだんつらくなる。でも、孝ちゃんは頑張っているのだから、そんなことぐらいでへこたれてはいけないと思う。孝ちゃんの部屋には国立大学入試の為の本ばかり、いっぱい積まれている。このくらい勉強しているのだから、私は何か言ってやっては可哀そうである。たとえ、それが言わなくてはならない事としても、あの子の頭の中にはいろいろ勉強の事がたくさん詰まっているのだから、やはり私は今のところはあの子の気ままにさせておこう。いつかきつと頭の隙間が出来た時、母として言うべき事は言う。それが子を思う親の取るべき処置であると思う。何とか早く楽にさせてやりたい。息つく暇なく勉強する息子を思い、私はやるせない気持ちにおそわれる。いつか必ず来るだろう。合格に喜ぶ春がきつと来ると、私は信じて疑わない。あの孝ちゃんの難しい顔が、喜びにほころび切る日が今に来る。その時こそ私は「よく頑張ったね、えらかったね」と、母として一せきの祝福の言葉をやりたい。今まで高校三年間、本当に規則正しい生活を自分で決め、時間の無駄なく、ただ勉学の道に励んできた。それは本当に激しい戦いであった

と思う。我が子としても、私はまぶしい存在だった。口答えは一段と激しかったが、まあそれは親子だから仕方ないだろう。だけど、朝5時40分起床、きちつきちっと時間を正しく使って、ひたすら勉強に向けてきた。何はともあれ素晴らしいと思う。孝ちゃんの頭の中には、日本一の学校目指して突進する純粋な姿、努力努力の日々であった。もうあと一歩なのです。決勝の日は。力を抜かず走りなさい、ゴール目指して。あなたの後姿は素晴らしい。

お母さんはこの世にあなたが生まれた事を、今ほど嬉しく思ったことはない。世の中の為になる本当の人間として人の為に尽くす事、自分の事だけ考えないで、広い心の人間として世の中に光り続けてください。お母さんが何も出来なかった事、これから身代わりとしてどんどんやって欲しい。正しいと信じたことは、真っすぐにやり遂げる人になって欲しい。東京に出たら、水が変わると体が心配だけど、でも一人前の男だから何とかなるだろう。いろいろな経験をして、だんだん大きくなるのだから。それはいいだろう。でも生まれて18年、子供の頃から育ったこの故郷を、思い出深いこの土地を忘れることはしないで下さい。そして優しく見守って、ご指導された母校の先生達の温かいお心を、小学校、中学校、高校、あなたはりっぱな先生方に恵まれて、とても幸せな子でした。こうして、ここまで成長出来たのも、皆あらゆる諸先生方の温かいお心と、感謝せねばいけません。小さい頃から、素晴らしい青年になると言って下さった加藤先生、山田先生、後藤先生。あなたも忘れはしないでしょ。お母さんは、そんなうれしいお言葉を忘れず、今日まで信じて歩いてきました。そしてその通り、こんなに成長してくれました。本当にありがたいと思います。

神様、ご先祖様のお陰。あらゆる人々の、とても恵まれた環境の中に育った孝ちゃんは、本当に幸せなのですよ。喜ぶことです。とにかく喜ぶことによって、あなたはもっと素晴らしく伸びることと思います。いい子になって下さい。気持ちの持ち方の上においても、成熟した人間になって下さい。お母さんはそんな姿を描いています。たとえ傍らにいらなくても仕方ありません。男の子として生まれた精いっぱい努力をして、お母さんに見せて下さい。頑張る事の好きな孝ちゃんだから、きっと何か出来ます。どんな事でもいいから、日本一の素晴らしい人間になってお母さんを驚かせて下さい。男の子で良かったと私は思う。体を大切に、これからも力を抜かず、頑張ってくれる事を祈る。

11月22日 水曜日(晴)

昨日、一昨日頃から朝晩は身にかけて初冬を思わせる。本当の冬になったら、このくらいではない。へこたれてはならない。孝ちゃんの為に5時にご飯のスイッチを入れに起きる。そして15分、また寝た。5時15分、たくさんの服を身に着け、お勝手場に立つ。ダイコンとネギをきざみ、お味噌汁を作る。片方でカツを揚げる。火がつき出すと体は温かくなる。こそこそと動く中に、寒さは気にならない。床を離れる時がつらいだけである。5時40分かっきり孝ちゃんを起こす。ブザーを2回押す。それで返答がなくてもいいのである。2度もやると怒る。間もなく、とんとんと階段を下りてくる音がする。毎日の日課である。ちょっと変わった息子であるが、でも勉強だけは頑張っている。そんな欲は言えない。今は何でもいい。文句は言わずに面倒みてやろう。気に障らないように送り出してやらなくては、勉強の妨げになってはいけないし、とにかくやる事だけしてやれば、それでいいと思う。これからのわずかな日が、あの子にはどんなに頭の痛む日であるか。何も助けてやることは出来ないが、ただ、朝早く行くあの子に気持ち良く世話をしやる事だけのことである。どうかあれだけ頑張る息子に神の恵みがありますことを。

この太陽も、この土地も私たちを守ってくれている。そんな中、一人の息子があこがれの東京大学目指して突進しつつある。とても光り輝く大きなものに、精いっぱい力を込めて走ろうとしている。青春の真ただ中を、わき目もふらずあの子は進んでいる。走り出してしまったのである。どうか願いを叶えてやりたい。そして生涯に忘れがたい青春の思い出として、刻ませてやりたい。協力しよう。そんなあの子の青春を作るために。今も、これからも、少しも力を抜かない息子に、私は大きな声で叫びたい。「頑張っていて！」と。どこまでもへこたれないよう見守ってやろう。今日は私の誕生日であった。

11月24日 金曜日(晴)

今朝、孝ちゃんが東大の何かの試験を受けたいけど、「お金がいるけど、受けてもいいか」と言った。私はすぐ、「受ければいいよ」と言った。そうである。ここまできてやれる事は、何でもやったらいい。例えお金がどれだけいっても、そんなことは問題ではない。もうやる気十分で、やる事は何でもし尽くす事が大事だと思った。「心残りのないよう頑張りなさい」と心で言った。今の私の生きている全部が、3人の子供の存在でもあるのである。今はとにかく孝ちゃんの東大合格を祈る。毎日の刻一刻をただ、合格のみに集中する気持ちである。

11月28日 火曜日

今朝は少し早めに起きられた。お豆腐の味噌汁を作った。そしてカツを揚げる。時間は十分だった。孝ちゃんは5時40分、ブザーとともにすぐ起きた。難しい顔をしている。でも何でも逆らわずにしてやろう。気のすむようにしたら、気持ちがいいだろう。私は我が子と暮らした日々にもうすぐ別れなくてはならない事を思うと、何も言うことはない。あの子の気のすむようにしてやりたいと、ただそれだけである。お弁当を階段に置く。自転車に空気を入れる。その前にシャッターを開ける。空には、とてもきれいな月が出ている。まるで笑っているように、細く半円を描いている。その傍で子供を思わせる星が1つ光っている。本当に親子のようである。母と子を思わせる姿であった。あの星は孝ちゃんなのだ。その傍で、いつも笑顔で我が子を見守っているその姿は、自然とはいえ、本当に神秘的であり、尊い姿であると感じた。「孝ちゃん、今日も無事で行ってらっしゃい」と心の中で言った。これだけ交通事故が多い今日、一日一日無事で元気に学校へ行ってくれる。ありがたいと思う。だれ一人けがをしても悲しい。ご先祖様の守りに感謝しよう。これから3月の受験まで、孝ちゃんはどんなに勉強し、頑張り続けるか。体が丈夫でありがたい。嬉しい。孝ちゃん、お母さんはあの空の月のように、あなたをいつまでも見守ってやりたいのです。

「お母ちゃん」と呼んでくれて18年、本当に嬉しかった。子供を持てた喜び。そして、あらゆる勉強の上でいつも上位で頑張ったあなたは、まさにすばらしいの一言に尽きる。これからも力を抜かず頑張ってください。そしてどんなに固く重い扉でも、あなたはきっと打ち破ることが出来るでしょう。頑張りなさい。そして、貴方の夢を実現する

ことです。どんな大きな夢でも、お母さんは叶えてやりたいと思う。人と人の生活は、格段難しい。でも一つ一つその足で歩いていけば、何でも分かる時が来よう。「気をつけて行ってらっしゃい」。

11月29日 水曜日（雪）

今朝はとても冷えている。そして、しとしとと雨が降っていた。6時15分、孝ちゃんはいつものように自転車で蘇原駅に向かった。今日はとても冷え冷えとした朝である。一日中寒いかな。8時ごろから大きなボタン雪が降ってきた。あ、初雪だ。やはり11月に雪が降る時がよくある。でも寒いということはいやだ。一日も冬は遅いほうがいい。いつまで降り続くかと思ったが、でもお昼前にはやんでしまった。早くやんで良かった。こんな雪が一日中降ったなら、道が歩きにくくて、子供たちが帰るのに困るだろう。

11月30日 木曜日

今朝は昨日より明るい空である。お月様は見えないが、星が一つ、この前のところに見えている。自転車を出し、空気を入れる。4,5回空気入れを押すだけで、手も肩も重くなる。年のせいか、全体に硬くなっているらしい。でも、たくさん空気を入れておいてやらねば、自転車に乗るのに疲れるだろう。孝ちゃんの大切な毎日なのに、私が疲れてどうなるか。自分に言い聞かせつつ、懸命にポンプを押す。

12月1日 金曜日（晴）

今朝もやや冷え込んではいるが、さほどでもない。昨夜も11時過ぎに寝たから、とても眠い。だけど5時5分、10分とたっていくのを見ていても、とても眠っていられるものではない。思い切り飛び起きることにした。そして、いつものように孝ちゃんの為だと自分に言い聞かせつつ、服を着る。5時40分、ベルを押す。孝ちゃんはすぐ起きてきた。大きなカツをひと切れとトマトを添えて出してやる。牛乳を沸かして持って

いく。全部きれいに食べていた。体の調子がいいのだなあ、と思う。食欲がないと心配になる。シャッターを開ける。今朝もお月様はなく、小さな星が一つ、いつもの所に光っていた。寒い風がなんとなく体にしみる。今朝の新聞に「各務原高校三年の子が体育中に急死」と出ていた。かわいそうなことである。

12月4日 月曜日（晴）

今朝6時5分、シャッターを開ける。空には少し雲にぼけているが、いつもの所に星が1つ、かすかに光っている。お月様は出ていない。今日もいい天気であればいいがと思う。孝ちゃんはまだ怒らず、機嫌がいいようである。よく眠れたのかなと思う。今日はお味噌汁を飲んでくれた。ダイコンとジャガイモとネギを入れた。野菜を食べなければ、体が不自由になる。毎朝、カツばかりではだめだと思う。けれど文句を言わずに全部食べてくれたことを喜ぶ。「孝ちゃん、良かったね」と心の中で言った。私に抱かれてお乳を飲んだあの頃、とてもよく笑う子だった。色の白い子であった。外へ出ると、まばゆいほどの白さだった。でも今は色も浅黒くなって男らしく成長した。東京に出て行く日も近づいてくる。体を大切にしてほしい。私は、どこまでも子供を守りたい。そして心身ともに大きくなってくれることを信じて待っていたい。

12月5日 火曜日（晴）

今朝は5時10分、時計のベルが鳴る。でも、とても眠い。眠くてつらい。だけど今まで頑張ったのが無駄になる。何事もやり通さねばと、自分に言い聞かせる。さっと床を離れ、いつものようにやぐらのスイッチを入れる。そして、ストーブに火をつける。やっと気がしゃんとしてきた。いそいそと体を動かす。「ああ、これが母なのだ」と、心に言い聞かせながら、私は懸命に動き続ける。孝ちゃんは今頃どんな気持ちだろう。これからの大きな壁を前に、どんな心の準備をしているのだろうか。とても不安な時もあるだろう。けれど男だから口にはあまり出さない。私は今朝も、そんな孝ちゃんの心の中をそっとのぞいていた。どうかこれから残されたわずかの日々に、安定した気持ちで暮ら

せることを心から祈りたいと。私はそれ以上、何も手伝うことは出来ない。けれど、母として一時も忘れることは出来ません。大丈夫だとも思いたい。けれど、一方では難しいとも思う。そんな2つの思いが絡み合ってやるせなく、もどかしい。早く3月が来ればいいと思うけど。とにかく孝ちゃんは可愛そうだと思う。孝ちゃん、お母さんのとても大切な孝ちゃん、遠いところに行くけど、体を大切にしたい。そしてあなたの希望のままに合格することを、私は切に祈る。今朝もいつもの空に1つ、星が光って見えた。時々、雲の間に隠れるが、でも雲の切れ間に見ることが出来た。今日は少し暖かい日になるかなと思った。昨日はとても寒かった。

12月11日 月曜日

今朝も眠い。つらくてたまらない。けれど5時10分、床を離れる。先週は1週間テストで、お弁当がいらなかったのが、楽であった。けれど今日から普通に行く。頑張っで起きてやれてよかった。昨夜10時頃までお客さんがあったので、少し疲れて、今朝はえらかった。今も目が閉じそうになる。けれど私はこうして、ここに書くのが好きでペンを取る。孝ちゃんの毎日の記録が作りたいからである。今は今しかない。過ぎていけば忘れられる。書きとどめておかななくては、といつもこうして書くのである。孝ちゃんは今朝はなぜか機嫌良く出て行った。猫が小忙しく泣いている。おなかがすいたのであろう。

12月14日 木曜日

今朝は月も星も出ていない。暗い空。夕方には雨が降ると、テレビは言っていた。でも、孝ちゃんは今日もいつものように何事もなく、元気に出て行った。少し猫と話していた。寒いので部屋に入れてやっていた。そして、朝のわずかな時間に猫との会話である。そんなことがあの子にとって、この緊迫した時間の中のせめてもの憩いのひとときなのであろう。もう1月足らずになった共通一次試験。あの子は今、どんな思いであるであろう。あまりその事はふれないでやりたい。その方がいいであろう。とても難しい

大きな山場である。でも前向きに生きている。へこたれてはいない。頑張りなさい。我が息子よ。素晴らしい息子よ。私のおなかの中に、そして、いつか私のお乳を吸った息子、立派になってください。あなたは素晴らしいご先祖様の生まれ変わりなのですね。大切にしたい。そんな幸せに恵まれた今の私を、どんなに夢見た日があったことか。神は私を見捨てはしなかった。ありがとうございます。今まで生きて良かった。本当にこんな生きがいのある人生を送れることは素晴らしい。毎朝、孝ちゃんの健康な顔を見てみると、私は嬉しくて本当に夢ではないかと疑う。でも現実なのである。空よ、土よ、空気よ、ありがとうございます。私を含む皆のものに感謝する。どうか息子がこのままで素晴らしい道にたどり着く事を祈る。そしていつか、そんな幸せを感じる息子になってくれることを信じる。良かったね、と息子を褒めてやれる日が必ず来ると信じて疑わない。神よ、守りたまえ。私どもの人生の全てをかけて、この息子の素晴らしい前途を祈る。ここまで頑張って勉強する、こんな素晴らしい気持ちを大事にしてやりたい。人と生まれて何事も一生懸命やる事は、男として立派だと思う。世の中に出ても何事も頑張ると思う。そんな息子に育てたい。人様に喜んで頂ける人間として飛び立って欲しい。

12月21日 木曜日（晴）

今朝は5時5分に起きる。トイレの水道の蛇口にツララのように太い氷がぶら下がっていた。今日は一番寒い日のようである。冷たい感じで、朝はつらい。風邪気味で鼻がくしゃくしゃする。だけど、私はへこたれてはいられない。孝ちゃんの為に、部屋を温めておいてやらねば。そして温かいご飯を食べさせてやろう。こんなに冷たい朝も、あの子は決して決意を変えない。ゆるめない。その精神には頭が下がる。若い者にしては感心する。パジャマも夏の半袖で、とても寒そうだが、これでいいと言う。気が変ではないかと思うくらいだが、まあいいであろう。お味噌汁にお餅を2つ入れてやる。何か言ってはいたが、まあ食べてくれた。ご飯一杯と牛乳一本、それにお味噌汁一杯なら何とかおなかがもつだろう。たくさん食べていかなくては、よけい寒いだろう。

車庫から自転車を出してやる。空にはいつもの所に星がきらめいている。ほかの星は小さくて見えるだけだけど、いつもの所にある大きな星は、なぜか光を放ってキラキラ



している。まるで孝ちゃんの今のファイトを表しているように、こうごうしく見える。私の為にある星のように思う。この光り輝く星のように息子は張り切っているのだ。

「お前も元気を出して頑張るのだ」と教えているようである。どんなに空気が汚れようと、空の星はその度に惑わされない立派なものである。我が息子を東京に送り出す事が出来るだろうか。とても複雑な気持ちで、私は毎日を過ごす。一発でスムーズに入りたいであろう。あの日本一の大学に。わき目も振らず、ただ突進する姿は見上げたものである。だけど、人間的にはまだ不完全である。とても不完全だけど、それはこれからでいいであろう。私は今の自分が本当に夢ではないかと疑う時もある。だけど現実だ。本当の人生の素晴らしい一出発点であり、楽しみへの人生の切符売り場でもあるように思われる。

外の風は冷たい。それは冬なのだから。車の行き交いも激しくなっている。師走なのだから。何もかも皆当然なのであるが、私にはいつもの冬とまた違う。怖いようでもあり、ほのぼのとしたような気持ちでもある。人間というものは、本当に不思議なものである。何も変わりほしくない生活のなかに、時には驚き、悲しみ、そしていらつき、悩む。そんな時、夜明けの空を眺める。そこには何ともいえぬ宇宙の神秘がある。どこまでも広がるこの宇宙に、私は底知れぬ神秘を感じる。それぞれに生きる人生に、大きく、時には小さな夢を持つ。その夢は、はかなく散って消えてしまうものもあろう。大きな夢に小さな火をつけて、それがやがて、とても大きな火の塊になる。がっちりとして人生の喜びを胸いっぱい吸い込んで、雄々しく生きることが出来たなら、人と生まれて生きたかがあると言えよう。そんなむすこになってくれたら、たとえ一夜の夢であろうと、私は生きた価値があると思う。酔いしれてみたい、そんな夢に。素晴らしい世の中に生きた夢を見たい。時には人と人との感情に惑わされ、怒る、いら立つ、暗い日を送ることもあるだろう。駄目だなと思っても、それは人並みの事だろう。

12月26日 火曜日

今朝も星が2つ出ていた。お天気がいいかな。今朝は6時20分に孝ちゃんを起こせばいいと思っていたが、どうも今日は早く出かけなくてはいけなかったらしい。私は何

も聞いていないので、6時15分前に時計をセットしていた。すると孝ちゃんが起きてきて、怒りだした。そしてご飯のおかずがないと言いだした。私はハウレンソウのおしながきがあったので、醤油をかけてカツオをかける。そして出してやったが、「こんなもん食べれるか」と捨てぜりふを言う。私は牛乳を沸かしてやって、熱いお茶を入れる。時間がないので、これより仕方がなかった。だけど、こんなに怒る孝ちゃんを見ていると、つい私はたまらない悲しさを感じた。今日の今まで、ただ子供のために生きてきた。毎日のお客様のいろいろな悩みも我慢してきた。何の為に今まで自分をつめて働き続けてきたか。着物だって、洋服だって我慢してきた。そして将来の子供たちの為に、少しでも残しておいてやろう。それが私の人生の最高の楽しみなのだと言いつけてきた。46歳の声を聞いたって、好きな着物なんか買えない自分をみじめに思う時もある。だけど、お金は使ったらなくなってしまふ。昔から一生懸命ためた。これだけのお金を子供たちに使ってやろうと思ってきた。子供って、これほど可愛いものであろうか。孝ちゃんの前だから、よほどのことも我慢してきたが、今日はとても自分が可哀そうで、私は泣けた。涙が出て止まらなかった。孝ちゃんだけは、どうしても東京へ4年間、仕送りしてやらなくてははいけない。絶えず私の頭の中には、そんな痛切な思いが走る。とにかく一生懸命お客様をやる事、気に入る事、そんな事がまず大切だと思う。

12月28日 木曜日

今朝は昨夜の雨も上がってやや暖かいが、まあまあ良さそう。3,4日以来ずっと忙しい日が続くけれど、孝ちゃんは朝、名古屋の河合塾へ行くので、私は毎朝5時14分頃には起きるのである。温かいお味噌汁とフライ物など揚げて、朝の食事に出してやる。せめてもの私の協力である。母親として何もしてやれないもどかしさを、朝のひと時に託すのである。でも、孝ちゃんは高校に入って3年、本当に自身との闘いを続けてきた。それは事実である。とても冷たい冬の朝も、こうして毎朝5時40分に起きてきて、6時15分に家を出る。6時24分の朝一番の汽車に乗らねば気が済まない。それは母親の私でも感心する。なかなか続くものではないが、よくここまで頑張っている。粘り強さが、どうか人生の良き帆となればよいと祈る。

12月29日 金曜日

今朝も星がキラキラ輝いていた。孝ちゃんの星が、どうしてこの星だけが1つ光っているのであろう。本当に他の星は、ただ出ているだけなのに、この星だけは光を放ちながら出ている。孝ちゃんの未来を暗示しているかのように. . . 。もっともっと光ってください。そして孝ちゃんの体と一体になって、この難しい試練を突破させてやって下さい。あんな高い遠いところに行くのは、ちょっぴり寂しいけれど、でも、人間と生まれてこの世に精いっぱい光り続けるような、そんな人になってくれたなら、こんな幸せはないだろう。一筋に学問への手綱を緩めないあの子は、いつかきっと、そんな存在になるに違いない。だけど、人と人との和をよく守って、温かい心の持ち主になって欲しい。

私は今日まで生き続けたこの人生に、そんな夢があったなら、それが実現する事が出来たなら、この46年、そしてこれから何年生きるかもしれない人生に「ありがとう」と言えそうである。本当にいろいろな苦勞よ、ありがとうと心から言うことが出来る気がする。今まで味わったさまざまな苦勞を思う時、この人生に我が子を得た喜びが、ひしひしと体いっぱいに広がって最大の幸せをかみしめるのである。でも健康でいて欲しい。神よ、本当に孝ちゃんに、私の可愛い孝ちゃんに幸せをやって下さい。あの子は猫も可愛がる本当は心の優しい子である。どうか十分に今までの学力が発揮できる、そんな入試の日を与えてください。喜ぶだろう、合格したなら。あの難しそうな神経質な顔がどんなにほころぶだろう。そんな日をやりたい。我が子だもの、何よりもその幸せを、今はやりたい。心の底から孝ちゃん、もう少しの日を頑張ると、ただひとこと言いたい。精いっぱい頑張ったこの3年間、いや中学頃から頑張り通した子である。何も言うことはない。そのままでいいのです。そのままの道をまっしぐらに進めばいいのです。お母さんも一生懸命協力します。さあ、今日も私は仕事で頑張ろう。

昭和54年

1月1日（晴）

昭和 53 年は、さまざまな事件を残して去っていった。悲しい事件、そして不況風は厳しかった。でも今日、いよいよ昭和 54 年はスタートしたのである。昨年よりも明るい気持ちで暮らせる事を祈る。孝ちゃんの大学合格は、なんとといっても大きなことである。あの子は強がりと言ってはいるが、心の中は不安であろう。どんなことを言っても祈ってやろう。絶対の合格を。一生の大きな節でもある大学入試をどうしても成功させてやりたい。大きくなった。青年になった。あんな小さい子であったのに、見上げるほどの背の高さになった。そして口は悪いけど照れ屋で、私には心で思っても感謝の言葉なんか言えない子。それでもいい。この私の体で育ったあの赤ちゃんが、こんなに大きく成長してくれた事を本当に嬉しく思う。親とはこんなものだろうか。今とても難しいところに立っている我が子を見ていると、何も出来ず、ただ祈るだけである。1月13,14日の共通一次試験を成功させたい。本当に健康でその日を迎えさせたい。素晴らしい快調な日をと、私は心から願う。強い子であっても、弱い面があるかもしれない。とうとう1月1日、あと12日間、孝ちゃんはどんな気持ちであろう。

1月3日 水曜日（晴）

今日、正月3日。ただ流れるように過ぎていった。今年は年賀状も来ない正月である。でも昭和54年の朝は、どんどん明けていく。そして、扉は大きく開きつつあるのである。13,14日の全国共通一次試験の足音も近づいてくる。それはまさしく現実である。年賀状がこなくても、その日はすぐそこにやってくる。孝ちゃんの心の中は、どんなであろう。それは口では言えない不安の渦でいっぱいであろう。1日24時間が、こんなに早く過ぎていくとは不思議である。早く1次も済んで、3月の4,5日も過ぎて、20日になればいい。そうしたら合格発表も分かるのに。じれったいような、やるせない気持ちも2年前、ふみちゃんの時に味わったことは確かだが、もう2年もたってしまったのか。私には、こうした苦しみがあるのか、楽しみがあるのか今は分からない。何ともいえない。それは、今朝の白い冷たい霧のように冷ややかで、痛烈なものを感じさせるものでもある。この空間から逃れたい気持ちもあるが、でも、この苦しみを乗り越えてこ

そ、素晴らしい未来の日の出があるのではないだろうか。私の心の中は、さまざまな思いでいっぱいである。どうか本当の日の出になりますように。

1月11日 木曜日

今朝はあまり冷たくもない。3日前から車を一本遅らせたので、体が楽である。私の体を思っか、それは分からないが、とにかく嬉しいことである。昨夜はなぜか疲れて、眠くて眠くて仕方がなかった。孝ちゃんの共通一次のことが頭を悩ませているせいかな、なぜか疲れる。仕事もあまりしないけど、眠くて横になりたい。やはり親子なのかなと思う。子供の苦しみは、私に感じて体に入ってくる。もう後2日後に迫ってしまった孝ちゃんの心の中を察すると、可哀そうである。でも、今朝も猫とたわむれている。やさしく話しかけている。足しないエビのフライを猫にやると言う。私は弁当のおかずにも少ないのに、やらなくていいと言った。すると、エビのしっぽを少し身をつけてやっていた。本当に心の優しさを見た。どんなに強がりを書いてはいても、私には孝ちゃんの心の中の真の思いやりを見るとき、「これで大丈夫だ。この子も何とか世の中に出ても、人から信頼される人間になるだろう」と、感じた。どうか共通一次も見事パスしてほしい。そして念願の東京大学に合格することを切に祈る。そんな晴の日を頭に浮かべる時、何ともいえぬ夢心地で涙があふれ出る思いがする。

そんな日が本当に来ることを信じて、愛する息子に出来るだけの事をしてやりたい。そして優しい言葉もかけてやりたい。いつか遠くへ飛び立っていく息子に、私は限りない愛をやりたい。本当にそんなことが現実にあるのかと疑う時もある。でも、それは本当に目の前に来ているのである。きっと良いことになる、私の全身に言い聞かせ、素晴らしい息子の姿を想像しては、そっと涙ぐむ。生まれた時、黒かったこと、とても温和に育ってくれた日々。いろいろな思い出が今、蘇ってくる。息子よ。ありがとう。これまで私たちを楽しませてくれた。子供を思って可哀そうで、泣いた日もあったけれど、でもあなたは真っすぐに素直に育ってくれた。勉強もよくやった。私が何も言わなくても、自分の力の限り、一生懸命頑張った。小学校の先生、中学校の先生、皆あなたにとって素晴らしい先生であり、貴い存在であった事を忘れてはならない。中学の時、あれ

だけあなたは五群に行きたかった。でも体操が「2」であったため、先生は四群に落と  
しなさい、と言われた。その時、あなたは家に帰り、畳の上で足踏みして悔しがったね。  
あの時の事も、心の中も私は忘れない。でも、先生の堅実な指導に私は深く頭が下がる  
思いだった。今考えると、何もかもあなたにとって本当に良い先生であったといえるだ  
ろう。子供を思う親にとっても、そんな奥深い先生の思いやりに、ただただ感謝の限り  
である。「ありがとうございます」と、深く頭を下げる心境である。そして今、とても  
大きな扉の前に立っている孝ちゃん。大きく成長したその姿、心身ともに成長して欲し  
いと心の中で叫ぶ母である。

幼い頃の貴方の面影が、今思い出されて、とても可愛くて母として生きる喜びがどっ  
と押し寄せてくる。幸せとはこんなものだろうか。私には、こんなに頑張る息子を与え  
られた事を身に余る喜びとして、どんな結果になろうとも、息子に意見はしまい。これ  
以上、あの子は出来ようがない。あとはご先祖様にお願いするのみである。よくやった  
と褒めてやりたい。たとえ、それが失敗であろうが、母として我が子に愛の言葉を送り  
たいと思う。体だけは大切にしたい。何もあせることはない。体があれば、後は何  
とかなるのだから。

1月16日 火曜日（晴）

今朝はお天気も良さそう。孝ちゃんは6時10分にブザーと共に起きてきた。「今日  
は寒いなあ」と口を開いた。私は「寒い。たくさん着ておらな」と言った。今朝は何  
となく心が晴れているようだ。共通一次が済み、まず一服といったところであろう。よ  
く出来た？と聞きたいが、私はなぜかそれが言えない。そっとしてやろう。3月の2次  
が済むまでは。そして3月20日の発表の時、もしかして晴の勝利を得た時には、母と  
して私のこの胸に持っていた全部のものを話したい。我が子への愛というものを、孝ち  
ゃんに本当に知らせたい。そして、母というものの愛をしっかりと体中に持って、常に正  
しい道を行って欲しい。この世に生まれて良かった、生んで良かったと喜べるような人  
間になってくれたなら、私はこれまで生きた46年、どんな運命もいっぺんに晴れて、  
とても素晴らしい人生となることであろう。

子供だけは幸せにしてやりたい、好きな道を行かせてやりたいと願って生きた私の人生に、本当に心から「ありがとう」と言えることができる。そんな夢を見て暮らそう。必ずいい子になると信じよう。幼い時のあの優しい気立て。あの心は今もきっと、まだ残っているに違いない。今朝も食事をしながら猫に話している。とても優しい言葉で話しかけているようである。私は温かいダイコンとホウレンソウのお味噌汁を食べてくれるかと、時々眺めては、猫との会話に心温まる思いがした。食事は大体全部食べてくれた。カツを半分ほどとエビフライは一匹食べたけれど、温めておいた牛乳も一本飲んでくれた。このくらいおなかに入れば、何とか寒さにも負けないだろう。とにかくご飯を食べていけば、健康は保てるだろう。今朝も5時半に起きるのがとてもつらかったけれど、でも、孝ちゃんのことを思えば、へこたれてはいられない。今、目の前にきている素晴らしい人生の出発点を、我が子と共に打ち破るのである。頑張ろう。

1月18日 木曜日（みぞれのち雨）

今日はとても寒い、冷たい感じの日である。それは孝ちゃんの今の境遇と同じである。本当に体に気をつけて頑張ってもらいたい。私はただそれだけを祈る気持ちでいる。郵便が届いた。浅野哲市先生から孝ちゃんに年賀ハガキが来た。「あまり緊張しないで頑張ってもらいたい」との言葉が書かれている。喜ぶだろう。こんなハガキを頂くと、あの子はよけいハッスルするだろう。先生のご恩に報いるためにも、本当に頑張るだろう。早く見せてやりたい先生の言葉を。私は心の中で「先生、ありがとうございます」と頭を下げる思いでつぶやいた。一人の青年を見守っていて下さる温かい先生を、私はとてもありがたく、涙の出る思いで読む。孝弘あてに出して下さるということを楽しんで、嬉しく思った。

外はとても冷たい雨が降っている。でも、孝ちゃんは朝早く出て行った。体を大切にしたい。勉強であまり無理してしまうと、体に応えるだろう。これから2月の私立の試験もやらなくてはならない。東京は寒いだろう。体を作っておかなくては。私の心配はどこまでも続く。何とか神のお守りがありますように。そして、あらゆる皆様の温かいお心に感謝しよう。

1月20日

もしか孝ちゃんが素晴らしい東大に入学できたなら、私はその時、どんな気持ちになるだろう。今考えても想像がつかない。今まで高校3年間、頑張り続けてきた孝ちゃんに、何とってやるだろう。何も言わずに泣いてしまうだろうか。よく頑張ったね、と優しく言葉をかけてやるかしら。その時のことを考えると、とても恐ろしい気がする。本当に我が子がそんな素晴らしい大学に入れるかしら。でも現実はそのに向かって突進している。それは現実なのである。私は時折、ふとその事を考えると、体中の血が騒ぐ思いがする。そして、夢かとも思う。だけど、もう時間は迫ってきている。人生の本当に大きな曲がり角に来ている気がする。学問だけが人生ではないというものの、孝ちゃんの今は、学問一筋の道である。全身をただ学問一筋に生きる今の孝ちゃんは、輝くものがある。口は荒いが、その姿勢は一人の男性として見上げたものである。そのまま、それないで真っすぐに行って欲しい。過激派などにならないようにして欲しい。小さい頃のあのとなしい素直な孝ちゃんできて欲しい。私はそれが最高の喜びなのです。

1月24日 水曜日（晴後曇）

今日は、やはり寒い日のようである。孝ちゃんは朝、猫を抱いたりして何か話しかけながら、時間ぎりぎりまで可愛がっている。本当に猫が好きなのであろう。そうです。そんな片時の安らぎが、あの子には必要なのだ。そっとしておいてやろう。猫と遊んでいる時は、あの子の顔は本当に和らぎ、優しさが漂っている。人間らしい思いやりが表れている。こんな時間を大切にしよう。勉強、勉強で気持ちがすさんでしまう。心を休めなさい。あなたはそんな時、本当の心身共に憩いの場となろう。そして3月4、5日の二次に備えて、うんと休息をとる事です。頑張った、本当によく頑張ったね。母として、私はこんな嬉しいことはない。人に言われなくても自発的にやる。その気力は私など到底及ぶものではない。男と生まれたあなたは、本当にまぶしいほどに光る。私の



目には光り輝いている。そのまま真っすぐに伸びなさい。曲がらないようにそのままに――。

私の描いた以上の息子に、あなたはなってくれました。欲を言うと、それプラスやわらかさがあったら、これほど良いことはないと思う。人を許すこと、そんな寛大な心になれたら、申し分のない人間となるでしょう。もし合格して東京に出れば、あんな大都会だもの、いろいろな冷たい風もあるだろう。とても悲しいこともあるだろう。そんな時、ヤケを起こさないで欲しい。せっかくこれまで真っすぐに来たあなたを、いじけさせたくない。我慢することです。人に好かれなくてはなりません。それは正しいことのためなら、どんな事でも頑張ることは良いことですが、自分の体だけは守って欲しいと思う。体さえ健康でいたなら、次の機会で活躍できるだろう。命を失ったら何も残らない。それだけは良く覚えておいて下さい。今まで蘇原の土地に育ち、地元の学校で温かい先生方に恵まれました。その一人一人の先生方の温かい真心に感謝せねばなりません。そして今、成長した体で身も心も本当に日本一の人間像として、立派に信頼される人間となるよう、努力することです。自己主義の人間になってはなりません。多くの人々に喜ばれる存在として活躍することを私は祈っています。私の息子だけでなくともいいのです。日本の息子になって下さい。どうせ日本一の学校を望むのなら、そのくらい大きな夢を持ってよいでしょう。

「孝ちゃん」と私どもは皆、あなたを可愛がってきた。そして男だという期待もかけてきました。でも、その時が目前にきてしまったのです。そんな時、私の胸の中はとてもさまざまな思いでいっぱいです。幼い頃の思いで、鈴を鼻に入れてしまった時のこと、いろんな思い出が今もはっきりと浮かびます。よく無事でここまで大きくなってくれました。そして、本当に頑張っていて勉強してくれる子になった。夢のようです。あなたはご先祖様の誰かの生まれ変わりなのですね。素晴らしいご先祖様に違いありません。感謝しようね。本当にありがたいことに心から感謝して、これからも歩いて行こうね。理屈はどうであれ、それはどうにもならないことであるものです。そんな時、神様に祈るのです。ご先祖に祈るのです。何か生まれます。きっと素晴らしい何かが現れると思います。とにかく健康第一、体をいたわって元気に暮らしてくれることを祈ります。

1月26日 金曜日（雨上がり）

昨夜から降った雨も上がったけれど、今日はいいい天気になるかな。孝ちゃんは今日も猫と話したり、おなかがすいてるんじゃないかと言っては、私を忙しくさせる。そうだと、それでいい。試験のことなんか口に出さなくていい。忘れていた方がいい。忘れは出来ないだろうが、たとえ一時でも動物と遊ぶ。そんな心のゆとりが、とてもいいと思う。エビフライを一匹、猫にやっていた。本当に心の優しさが表れている。そうだと、2月5日には10万あまりいると言っていた。12,3万円用意しておこう。あの子が一生懸命頑張っているんだもの。何も言うことはない。親のありがたさなんか、年をとれば分かるだろう。私は一度決めたことは必ず成し遂げたい。途中でくじけるのはいやである。国立に入れば、あとはそんなにいらないだろう。どうか、そんな栄光を祈る。孝ちゃんの心の中を思う時、胸が熱く、やるせなくなる。でも、静かでいよう。男の子が自分で決めた道だもの、信じて待ってやろう。いつか喜び合える日も来よう。神様なんか頼んでもらわんでもいい、と孝ちゃんは言うけれど、私は一生懸命お願いしよう。いつか孝ちゃんも分かる時が来るだろう母の愛を、神様の存在を。「ありがとう」と心から言えるそんな日を。私は長い気持ちで待っていよう。可愛い息子だもの。何も言わなくてもいいけれど、世の中に出れば、やはり親の恩を感じる人間にならなくては、信頼がないであろう。健康でいて欲しい。いつまでも私の生きている限り、我が子の幸せな姿が見たい。そしていつまでも守ってやりたいと思う。

1月29日 月曜日

今朝は起きるのがつらい。だけど、孝ちゃんのためにどうしても目が覚めてしまう。やはり子供は可愛いのだと、つくづく思う。今、こんな身近で世話してやれるけれど、東京に出てしまうと何もしてやれない。寂しいだろう。心配だろう。でも孝ちゃんの修業にもなることだから、我慢しよう。きっと、あの子は立派に頑張り通すだろう。そんな夢を思う。孝ちゃん、本当にあなたはそんな遠い所へ行くのかね。今まで「お母ちゃん」と呼んでくれたけど、もうしばらくは寂しくなるね。まだ試験も済んでいないのに、

こんな事を思うのはおかしいけれど、でもあなたは必ず合格すると思うから、お母さんはこういうことを思うのです。東京は暮らしにくいのではないかしら。空気が悪いのではないかな。そして昨日、一昨日とあの銀行ギャングのように、人質にして悪いことをするのに巻き込まれては大変だけど、命を守って欲しい。神様、どうかお守り下さい。2月15日には東京へ私立の試験に行く。風邪をひかないように、最後まで頑張って自分の志を遂げてください。私はそんなあなたを見ていると、前向きの素晴らしい青年を感じ、何ともいえぬ嬉し涙が出ます。とても可愛かった小さい頃が浮かんできます。ただ、ニコニコとしている子だった。障子も破らなかった。指を突っ込んで私は破らせたこともあった。すると、私の顔を見て少しためらっていたが、ニコニコと笑って、とても喜んで破ったものだった。

2月8日 木曜日

今日は晴時々曇となっているが、どうだろうか。よい天気であればいいが。孝ちゃんは、少し風邪気味みたいだけど、少しでも暖かい日だと楽だろう。一昨日から孝ちゃんの自転車がパンクしたとのこと。主人は各務の足立自転車店へ直しに持って行った。だけど、もう直っていると思うけど、取りには行かないことにした。それは、この頃、孝ちゃんが背中か腰かしらが痛いと言っていたので、自転車で朝早く行くと、よけい悪くなるといけないので、無理に自転車は取りに行かない、そして朝、蘇原駅まで送って行くことにした。帰りも迎えに行けばいい。昨夜、孝ちゃんが「もう自転車、直っとるやろ」と聞いた。私は「まだ直っとらんと」と、うそを言った。せめてこんな時くらい、楽をさせてやりたい親心である。でも気の強い孝ちゃんに悟られないよう、二人で気を使っているのである。

自分のことは自分でやるという強い精神の孝ちゃんには、今どんな親心も水の泡と同じで、聞き入れない。愛情と思えることも、自分の信念のもとに許されないのである。でも今、もうすぐ受験を前にして何よりも体が大切である。何としても体を楽にして事に専念しよう。純粹に成長した孝ちゃんは素晴らしい。少し口答えするけど、でも、それでいい。家でどんな事でも吐き出してしまえばいい。お母さんはそれでいい。嬉しい

のです。18年間、丈夫で育ててくれた。それだけでとても嬉しいのです。世間のあの悲惨な自殺、人殺し、私は耐えられない。我が子がもしも、そんな惨めな姿になったら、どんなに悲しいことか。どうか命を大切にしたい。そして真っすぐな道を行って欲しい。私はこうして書いていても、とてもたまらない。子供への愛を感じ、涙するのである。もう僅かの日数しかない。受験まで孝ちゃんは時々怒るけど、でも猫を相手に優しく話している時も多い。それでいい、それでいいのだと、私はつぶやく。大きなものを前にして、うんと心のゆとりを持ったほうがいい。そんなにガタガタしなくても、孝ちゃんなら必ず合格すると思うよ。

日本一の大学へ本当にもし合格して入学することが出来たなら、孝ちゃんはどう喜んでくれるだろう。そんな喜ぶ姿が早く見たい。そんな時こそ、人生最大の喜びだろう。私は泣いてしまうだろうか。今、こうして考えるだけでも涙が浮かんでくる。感激するだろう。それも、もう3月20日その日である。あと一ヶ月と12日。そう長くはない。それまで、どうか私立も完ぺきに通過して、本番の3月4,5日をこのままで迎えさせてやりたい。孝ちゃん、あなたの挑戦の時は、そこにやって来たのです。高校五群に行けなかった悔しさ、そして、三年間わき目もふらずに貫いた精神。お母さんはあなたを生んで本当によかった、といつも心の中で言っていた。嬉しくて感謝していた。時々、口答えするけど、でも小さい頃のあなたの本当の優しさを知っていたから、いつも安心だった。きっと、もとのあの優しい心の孝ちゃんに戻ってくれると信じていた。好きなだけ言えばいい。発散の場所にしたらいいと思っていた。お母さんはあなたを生んだ母だもの。やはり信じて良かった。これからも私を悲しませないように、真っすぐに進んでほしい。どんな事でも好きな道を行けばいい。あなたの信念の下にやることならば、私は大丈夫と思う。人間として立派に生きて下さい。母として生きた18年間、貴方の絶対の味方であったのですよ。どんな時にも、憎むことは出来なかった。

子供というものは、親にとってそんなものです。どんなに怒鳴っても、何か体の調子が悪いのかなと心配するそんな親。世の中の皆、親となって知る。こんなありがたい心を、いつまでも忘れてはなりません。どんな時にも、そんな親心を忘れず、悲しませることはしないで下さい。

2月9日 金曜日

孝ちゃんは昨夜、夜中に起きて勉強するようなことを言っていた。でも今朝「寝てしまった」と言ったので、安心した。あまり寝不足はいけない。それでいいのだと私は内心ホッとした。私は日が迫ってくるのを祈る気持ちで迎えている。今、私は自分の本分を一生懸命働くこと、そして立派に孝ちゃんが試験に臨み、本番をしっかりとやりぬくことである。その為に祈ろう。今しっかりと気持ちを落ち着けて対処すべきだと感じた。慌ててはならない。心が動揺してはならない。今の私には我が子に最も良いということを考えてやらなくてはいけないのだ。頑張ってくれるために、母親として何をすべきかを考えなくては。もうわずかしかない時間を、最も有効に使っていこう。今日という日も、またたく間に過ぎてしまうだろう。大切にしなければ。私もやる仕事はたくさん残っているけれど、なぜか手につかない。でも頑張ってみよう。とても息詰まる時間である。一日一日、体の中に何ともいえないさまざまな思いが入り込んで、私を苦しめる。こんな気持ちは体に毒である。信じよう。神仏を。絶対の信念で生活しなくては、孝ちゃんも不安である。何気なく話す言葉にも、私の心は揺れる。このまま平静な姿でいて欲しい。頭が狂ってしまったら大変。どうかそのまま立派に堂々と試験に向かって欲しい。今朝も祈る気持ちで送り出した。心の中で思うだけで、一言も試験のことは言わない。これでいい。何も言わなくても親子だもの、通じ合えるものがあるだろう。孝ちゃん、これからはどんな時にも静かに考えて、早まってはならない。そうです。たとえどんな結果が表れようとも、命を大切にすることです。男だもの、これから長い人生を、そんなに慌てなくていい。命さえあれば何とかなるのだ。

2月10日 土曜日

四年間は孝ちゃんの為にも、仕送りをせねばならない。先おぼつかない気もするけれど、一步一步足を踏み出して、今を生きよう。今日一日、無事に暮らし、お店もスムーズにいけば、本当に嬉しいことである。孝ちゃんは今朝、食事のときに文句を言った。私はおいしいものは作ってやれないけど、あまりもったいないことを言うので、少し意見をした。だけど口答えは十にも跳ね返る。まあいいだろう。今はこんな時だから、こ

のへんで諦めよう。だけど、合格した時はこんなことを少し言い含めてやらねば。東京に出てから泣くことになるといけない。「感謝」を教えなくてはいけないと思う。でも、都会に出れば何かにつけ分かる時も来ようが、本当に我が子ながら憎らしい言葉を言う。だけど信じよう。私のおなかの中に育った息子であること、可愛い子供なのだと、自分に言い聞かせる。いい子になって欲しい。人様に憎まれないような青年になって欲しい。学校は今日までらしい。明日から休みらしいけれど、15日に東京へ行くので服を買ってこなくてはいけないのに、行くかしら。少し変わった子だから。でもお金だけは用意しておかねば。

2月15日 木曜日（夕方雨）

今朝、主人と一緒に孝ちゃんは東京へ向かった。上智大学の試験を明日に控えて出発したのである。でも健康で行ったので嬉しい。今まで、先が長いように思っていたが、とうとうその火ぶたが切られてしまった。どうにも止まらないのである。どうか東京に着いても、立派に試験をやり遂げてくれることを祈る。あれだけ東京、東京とあこがれていたのだから、まあ心配はないが、いくら私立といっても一つ一つ成功させることだと思う。「私立はかけるだけだから」と孝ちゃんは言っているが、今こそ高校三年間頑張ってきた力を一気に出し切ることにある。男と生まれた大きな望みと、勇気を持ってぶつかることである。「孝ちゃん、頑張っ」と、私は無言の言葉を言うのである。とても我が子は可愛い。特に男の子は素晴らしい。頼もしい。どうか東京の土地をのみ込んで、おじけないう頑張っ欲しい。今まで学生生活の充実した勉強ぶり、何はともあれ、褒めるべきである。口答えは激しいけれど、でもそれは仕方がない。心の中では感謝もしているだろう。この土地を離れば、そんなことは分かってくるだろう。とにかく今日は第一歩を踏み出した日。孝ちゃんに栄光あれと祈る。今日は東京で、受験する大学全部を調べて回るそうである。くたびれるだろう。

2月16日 金曜日（晴）

今日はいよいよ、上智の試験日。朝は気持ちよく起きれたかな。平常は早起きだから、大丈夫だろう。今、10時20分。もう多分、試験は進んでいるだろう。難しいかな。多分、勉強はしていたが、でも本番の試験だから案外難しいかもしれない。いくら合格しないでもいいと言っても、やはり合格した方がいい。いい加減にやらなければいいが。口では「どうせ行かへんのやで」とは言っていたが、そんなことないだろう。頑張ることです。孝ちゃん、東京と蘇原とは遠く離れているけれど、私は言ってやりたい。力の限り頑張れば何かが出る、若い青春を燃え尽くすのです。二度とない青春を思い切り一。そんな息子であって欲しい。いい加減な孝ちゃんではないはず。体の方は大丈夫だと思うが、昨夜電話もかからなかったことだし、いいと思う。毎日の時間が何だか速度を早めて過ぎて行く。私の体の中も、とても複雑なものがある。早いほうがいいようでもあり、怖いようでもある。でも信じて待とう。絶対の合格を。私は疑わない。孝ちゃんの事だもの、必ずやり遂げるに決まっている。良かったね、良かったねと今にも口に出そうになる。そんな嬉しいことが現実にあるのか。考えても身震いがする。小学、中学の先生方も陰ながら、皆祈っていて下さる。そして温かく見守っていてくださるに違いない。ありがたいね、孝ちゃん。

人と生まれ育ち、こんなに皆様の温かいお心に包まれて、こんな幸せはないのですよ。お母さんは子供を生んでよかった、本当に良かった、と心の底から喜びます。必勝をどこまでも信じて、これからもいって下さい。きっと明るい光が待ち受けていてくれます。今日の日も無駄にしないよう頑張るなさい。お母さんも一時間も無駄にしないよう生活するつもりです。お店は暇だけど、でも悲しまない。今は孝ちゃんの必勝のみに心を傾けよう。それが一番です。

2月21日 水曜日（雨）

今日は朝のうちは曇っていたが、とうとう雨になってしまった。このところ雨が近いけれど、孝ちゃんは東京へたっていった。午前中は新幹線が動かないらしい。午後1時50分のに乗るらしい。うまく乗れたのかな。昨日、孝ちゃんが言っていた。「東京へ行っても、電話なんかかけえへんでね」と。まあ一週間のことだから、何も無いと思う

けど、電話くらいかけても良さそうなものだと思う。あの子がいったん言ったら聞かないから、諦めよう。何も無いと思えばいい。男の子って本当にこんなものか。まあ、男だから心配しないことにしよう。何しろ遠い東京のことだから仕方がない。

もう今頃、上智の寮に着いたかな。どうせ電話はかからないから分からないけれど、今5時半だから着いただろう。今も雨が降っている。東京は雨かな。こちらとは違うと思うけれど。あの子は親には何も用意させないで、さっさと自分で用意して行ったらしい。送り出すと照れくさがるので、送らなかった。本当に変わり者である。今はそのままそっとしておこう。何ととっても、目の前のことが一番大切だから、機嫌を損ねないようにしよう。これから一週間、家の中は静かになる。だけど、あの子は大丈夫にやっていけるかな。足りないものはないかな。お金は一万五千円持っていると言ったけど。昨日、私は一万円札1枚と千円札4枚、五百円札2枚、そして百円硬貨を3千円くらいやった。そのくらいあれば、何とか一週間は過ごせるだろう。宿賃は払ってあるし、新幹線代も払ってある。お土産と都電の代金くらいだけど、お金は足らないと困るだろうから、多く持って行けばいいだろう。あまり無駄遣いはしない子だから安心だ。私のことは心の中でよく理解している子である。口ではひどいことを言うが、まあ何も心配しないで一週間は過ごそう。ご先祖様をお願いして守っていただこう。あの子は、私がお水を供えたり、お参りするだけでもけなす子だけど、我が子だから憎めない。一生懸命祈ってやろう。どんなことがあっても失敗は許されない。大事なときである。今まで、あの子が志してきた信念を、本番に向かって真っしぐらに突進する。高校三年間のすさまじい勉強、努力に努力を重ねた日々。忘れはしないだろう。そんな苦勞を一気に大空に美しく、栄光の火花を咲かすのです。

孝ちゃんは、その信念の下頑張ってきたと思う。母として、私は何も言えないけど、後姿を祈りつつ神様、ご先祖様にひたすら守っていただくことを祈ります。ほっそりとした子だけど、でも体は丈夫に育ってくれました。あんなにおとなしい子だったけれど、口答えもする強い子になってくれた。とても私など相手にしてくれない子になったけれど、でも子供はなぜか小さい頃の、あのあどけなさは感じられます。やはり母なのかな。不思議です。私に鋭く反論する時も、5分もすれば元の心になってしまう。何もためらうことなく言う我が子に、それでいいのだと心に安らぎさえ漂う。母とはおかしなもの



である。とっておとなしい孝ちゃんだった。あの子が今、恐ろしい子に変わるとは思えない。そうだ、私の目の錯覚だと思う。孝ちゃんは私のことを思うとっても可愛い子であった。たまには足でももんでくれた時もあった。女の子のように優しい子であった。もっと男らしい子になりなさいと言った事もあった。そんな子が大それた悪い子にはならないに決まっている。しっかり勉強する子になった。素晴らしい成績をとる子になっている。一番という素晴らしい子になってくれたことを感謝しよう。悪いことばかり思わないで、よい所がたくさんあるではないか。

2月27日 火曜日（晴）

今夜、孝ちゃんが東京から帰ってくるらしい。上智の発表が今日らしい。一つ一つ合格すると思う。3月4,5日はもうすぐ間近。恐いような気もする。もうひと息、力を抜かず頑張るだろう。あの子のことだもの、きっとそうだと信じよう。孝ちゃんは夜、何時頃帰るだろう。遅いとは言っていたらしいけど、元気でいるみたい。だから、まあ安心。男の子はこんなものだろうが、心配してやらなくても良かったのか。変なものである。もうすでに私の手を離れようとしている。それでいいのかも。

3月1日 木曜日（晴）

今日はいい天気らしい。ありがたい。孝ちゃんは「どうしてここは、こんなに寒い」と言う。東京は暖かだったらしい。最もあの頃は、特に暖かかった。でも、何を言っても孝ちゃんには気をいじけさせないようにしなければ。時々鋭く私をののしる。だけど、あと3日後に控えている国立二次試験のことで、頭がいっぱいなのだ。それはそうだろう。どんな気持ちでいるのか、可哀そうだ。「必ず合格するよ」と、心で言った。私のとても可愛い、とても大切な息子だもの。泣きは見せたくない。きっと跳び上がって笑う日が来る、くるんだと自分の心の中に、全身に言い聞かせる。本当に3年間良く頑張った。努力してきた日々であった。並大抵の努力ではなかった。一日一日、懸命に生きたあの子であった。たとえ口答えしても、私には何も変わらぬ昔のままの可愛い息

子であった。悪口を私に放つことによって、あの子の心が軽くなるのかもしれない。意見ならいつでも出来る。今はとにかく必勝のみである。ただそれに向かって全員が進むのである。孝ちゃん、もうひと息。ゴールは見えている。勝つのです。必ず勝つと信じて下さい。そして、自信を持って走るのです。とても長かった道であった。苦闘の道をあなたは頑張った。頑張って走ってしまったのだ。ありがとう。お母さんは、そんな子供を持って嬉しい。何よりの宝である。たとえ結果はどうであれ、これまで歩んだあなたの道を、私はまばゆく眺め、本当に今まで生きてきて良かったと思う。素晴らしい息子や娘に恵まれて、この上ない幸せだと思う。金銭の苦労はあろうとも、それはこの3つの宝を手に抱く時、何もかも消えて、ただ、幸せだけの喜びに浸るでしょう。元気であることである。

今朝の新聞には、上智大学の合格発表は出ていなかった。合格とは思いうけど、すっかりしない。今日中に通知があればいいが。神様、どうか合格していますように。そして孝ちゃんに自信をつけさせてやりたい。もし合格したら16万円入れて欲しいと、孝ちゃんは言った。もちろん私は、そのつもりである。どんなことがあっても、安心感を持たせて国立二次に向かわせてやりたい。今まで長い年月、私は夢中で働いてきた。そして、我が子への愛ゆえに頑張った。時には共に泣いた。母としての悲しみ、仕事への苦労を私は忘れない。子供たちには満足に母親らしくできなかつた。けれど心の底で、いつも言っていた。「大きくなったら好きなようにさせてやりたい」と。ただそれだけが、私の子供への償いだつた。仕事のためにだけ生きる私ではないことを知って欲しかった。私の命を支えてくれた子供たちよ、本当にありがとう。今、孝ちゃんは大きな難関の前にきている。本当にふびんだ。でも男の子だもの、その強さでもうひと息頑張るのです。そして後はニッコリ笑って、私の顔を見れる孝ちゃんになって欲しい。そんな日が来て欲しい。明後日、東京へ行くのだか、とにかく元気でいて欲しい。もう孝ちゃんは汽車に乗るところだろう。卒業式のため、北高へ行った。

3月2日 金曜日（晴）

今日まで丸二日、上智の通知は来ない。郵便の間違いではないか。それとも、やはり落ちたのか。でも本当に心配である。あれだけ自信を持って帰ってきたのに、可哀そうだ。運というものがあるから、やはり母としてたるんでいたのではないか。情けない。今日から頑張ろう。明日から東京へ向かう。カバンの中にお守りを入れてやろうか。おそらく持って行かないだろう。そんな時、私は何をすべきか。心が暗い。もし国立も失敗に終わったなら、目の前が真っ暗である。いや、これからなのだ。あの子の一生をかけた運命は、私一人でも信じてやろう。絶対の必勝を。とても可愛い息子だもの。荒れる姿を見てはむごがり、優しい顔を見ては可愛い。母とは愚かなもの。家ではうんと荒れてもいい。真の心が正しいならば、いつかそれは晴れる時もこよう。人間らしく生きて欲しい。一度の失敗くらいして良かったと思えばいい。これからの活力の源となるように頑張ればいいのだー。

お昼頃、ドサッと書類が来た。郵便屋さんが印をお願いします、と言った。「上智」という字が見えた。あ、合格通知だと瞬間思った。やはりそうだった。鉄道の加減で遅れたとの事。私は本当に夢心地になった。喜ぶだろう、孝ちゃんは。「ありがとうございます。ありがとうございます...」と何度も心の中で叫んでいた。こうして第一回は合格した。良かった。

3月3日 土曜日（晴）

午前11時30分の三柿野発で、孝ちゃんは名古屋を経て東京へ向かった。4,5日の国立二次を受けに行ったのである。まあ元気で行ったから大丈夫だろう。

3月4日 日曜日（晴）

東京は雪だと、テレビで報道していたそうである。東大の入試の模様を写していたらしい。スムーズに出来ればと祈りつつ、お客様に接していた。風邪はひかないだろうか、とも思ったが、まあ二日間だから何とか頑張るだろう。「孝ちゃん、頑張りなさい」と心の中で言った。この日のために高校3年間、どんなに冷たい朝も、眠い夜も、大きな

夢と希望を胸に描いて、あなたは頑張った。そして自分にあくまで厳しく戦ったのです。男の子に生まれた本望を、精いっぱい頑張りぬいたと言えよう。だけど運命はどうなるか知れない。たとえ、どんな結末になろうとも、今までなしえた勉学の糧は無駄ではないだろう。それでいいのです。私も母として、何もいうことはない。元気でいてくれればいいのです。

3月5日 月曜日（晴）

今朝も岐阜地方は晴れているが、東京はどうだろう。雪かな。孝ちゃんは朝起きれたかな。神経質だから、まあいいだろう。途中で眠くなったら大変だし、よく眠ることが大切だから、今日一日頑張ることである。この二日間で、今まであの子の夢みた、志した全ての決着である。どんなに希望を持って今まで進んできたか。とても私共では出来えず、続かないことである。あの子は本当に真の強い子である。あらゆるラジオ、通信を欠かすことなく一筋に闘った道であった。孝ちゃん、今日一日、本当に頑張って下さい。

夜9時少し前、孝ちゃんが東京から帰ってきた。無事に帰ってきてくれて嬉しい。三柿野駅まで主人が車で迎えに行く。駅で少し面白くない事があつたらしく、機嫌が悪い。でも試験のほうはそうではなかったらしいと言う。少し憎らしいけれど、でも仕方がない。東京での緊張がいつぱんにほぐれたせいであろう。許そう。夜1時近くまで、いろいろ入学金のことなど話し出した。黙って聞いてやった。気の強い子であるが、いつかこの子も、私の母としての心を分かる時もこよう。お金のことなんか何も言うまい。国立が合格しなければいけないなどと、言うまい。可哀そうである。やはり私のこのおなかから生まれた大切な可愛い子供だもの。

3月6日 火曜日（晴）

今日はお休みなのでお花を買いに行って、、お墓参りをした。ふみちゃんと一緒に午前十時頃に家を出る。歩いて行っても暖かくていい日である。私の心の中も、なぜかホ

ツとした気持ちである。昨日までいろいろと入試を受けてきた。だけど結果はどうであろうと、それは仕方がない。努力したいままでの月日は素晴らしいの一言に尽きる。それでいい、それでいいのです。たとえ学校はどこへ行こうとも、自分と闘ったその精神力は、何物にも変えられない大きな糧となるでしょう。よく頑張ったと褒めてやりたい。私は母親だもの。可愛い我が子に最大の言葉をやりたい。今まで、どんなにつらく苦しい日も克服してきた姿。男の子だけに、貫けたのだろう。私は嬉しい。本当に何も言葉はない。子供を生んだ喜び、感謝がひしひしと私の体を流れていく。ありがたい、本当に良かった。どんな事があっても、私はこの子の為にこれからも努力して、立派な人間になるまで、そっと守ってやりたい。

今日、慶応大学（医学部）の一次発表らしい。電話がかかると、息子は電話の前で何となくじれったく待っているようである。可哀そうである。強がりをはいるが、心では心配なのであろう。45人に1人の合格だから、駄目と思っているらしいが、本当の心は分からない。私も、そんな素晴らしい大学に合格することが出来たなら、本当に嬉しい。まあ欲にはきりが無いけれど、でも待つことである。私は11時12分のバスで岐阜へ向かう。まだ電話はかからない。合格でも不合格でもかかるというけれど...。1時頃、岐阜市内にて家へ電話をする。そして合格を知る。私は今一度、大きな喜びをかみしめる。胸がふくらむ。「孝ちゃん、よく頑張ったね」と言ってやりたい。私はこんな喜びを誰に話したらよいのか。この空も、人も皆、素晴らしく見える。何か良いものだけがやってくるようで、この上ない喜びである。でも20日の東大はどうであろう。それはどうであろうとも文句はない。最高の学部だもの。簡単には受からないだろう。けど、もしかしたら合格するかもしれない。そんな楽しみも残しておこう。絶対でなくてもいい。これでいいのである。皆様ありがとう。ご先祖様ありがとう。私はこうして生かされていることが、本当に嬉しい。感謝しよう。

3月8日 木曜日（晴）

孝ちゃんは明日、東京へ行く。これで三度目の東京行きである。今度は慶応の二次試験と、早稲田の発表である。どうだろうか。合格しているだろうか。駄目でも一つは受

かっているのだから心配はないが。でも、合格するに越したことはない。後国立の発表もあるし、まだまだ気は許せない。今日は夜明けから眠れなかった。それは何か一つの塊が遠くからだんだん私に近づいてくる感じ。それが何であるか、つかめない。だんだん私に近づいてくる。私は息苦しくなる。本当に息苦しさを覚える。何者かに襲いかかれるように、私は苦しさを感ずる。孝ちゃんのこと、私の体全体は、時には青春の如く燃え、時にはたまらない悲しみを思う。時よ、どうか私たち親子を守りたまえ。静かに時を送るとき、私の心の中は我が子を思う痛切な願い、そして愛、とても強い愛の力を我ながら感ずる。二十日の東大発表の日、その日は刻々と近づいてくる。私に鋭く迫ってくるかのように。私は何をしたらよいのか何も分からない。もし合格するかもと、ふと思う時、私の胸はグッと熱くなる。なぜだろう。それは感激か、それとも恐怖か。私の体をめぐるさまざまな思いがやるせなく、とてもつらく私をいじめる。

3月9日 金曜日（晴）

今日は孝ちゃんが11時頃、東京へ行くと言っていた。まだ寝ているらしく、下りてこない。昨夜も遅くまでふみちゃんと話していたらしいから、よく眠るといい。

3月11日（晴）

今日、浅野哲市先生に電話をかけた。夜の七時半頃であった。孝ちゃんの大学合格の喜びを報告した。そして、今までいろいろご指導いただいたお礼をくれぐれも言った。先生も、とても落ち着いた言葉で淡々と話された。それは父親にも似た温かい言葉であった。「よくやってくれました。本人の実力です。」私は母親として、こんな素晴らしい先生方のとても優しいお言葉を、終生忘れることは出来ない。何を言っても可愛くて仕方ない我が息子を、温かく守り、励まして下さる。素晴らしい先生方の真心を体全体に受け取ると共に、先生方のご恩に報いるべく孝ちゃんが、努力してくれることを切に祈りつつ、私は電話を切った。

今、この合格の喜び、感激を味わうことの出来る幸せを、しみじみと嬉しくかみしめている。三月の空よ、大地よ、皆私を取り巻く全てのものよ、ありがとうございます。それは母たるものの、だれしも願う唯一の夢であった。私のとても可愛い息子。今初めて笑顔が甦った息子。たとえ遠くへ行っても、私の心は離れない。いつまでも守ってやりたい。本当に幼子のように抱きしめてやりたい。息子よ、強く正しく生きるのです。それは自分の為です。世の中に貢献できる人間になりなさい。私たちの人生では成し遂げられなかった夢を、あなたは出来るだけやるのです。生を受けた喜びを、今一度感じられるような、そんな素晴らしい人生にしてください。自分の志を貫き、どこまでも勉学の道に情熱を燃やすこと、そんな幸せはないのです。上智、早稲田、慶応一次、全部合格した今、そして国立の発表を待つだけ、私は限りない希望と喜びで胸膨らませて生きています。

3月12日 月曜日(曇)

今日はとても忙しくて、ありがたかった。孝ちゃんは下宿を探してくれと、荒れている。もうあと8日で合格発表だから、気分的にすさんでいるのかな。少し可哀そうである。自分では合格すると思っているみたいだが、本当に真実であって欲しい。私も同じように心が痛む。たまに大声で荒れていると、やはり我が子がふびんである。早く発表されればよいのにと、焦る。どんなにもがいても、20日という日はなかなか来ない。待ち遠しい、じれったい。さまざまな気持ちが私を苦しめる。毎朝1時、2時、3時と夜明けに目が覚める。そしてなぜか眠れない。体は疲れているくせに、こんな日が続くので、私の体はひどく疲れるようである。毎晩のご先祖様へのお祈りを、大切に進んでいこう。

3月13日 火曜日(晴)

今朝も4時頃、目を覚ます。そして孝ちゃんのことを思うと、眠れない。まだあと7日ある。長いなあ。どうしてこんなに長いのだろう。早く来るといいと思う。

3月14日 水曜日（晴）

今日は慶応の二次の合格発表があると言っていた。でも二次は「僕はこの大学には入りません」と言ったというから、おそらく駄目でしょう。でも一次さえ合格していれば、合格と同じだと、先生も言われた。それでいい。何も言うことはない。医学部といえ、莫大なお金がいることは聞いている。いくら私立で一番お金がかからないといっても、年百八万円の授業料では見通しが立たない。いくら息子の為といっても、それは出来ない。孝ちゃんは家の事情をよく知っているから、面接であんなことを言ったのであろう。ちょっぴり可哀そうな気もする。20日の東大の合格発表が気になる。それに当日、私も行くことになったので、何だか本当に気が変になりそうである。あとの下宿の手続きがあるとはいえ、でも怖いような気がする。絶対に合格しているんだと、自分には言い聞かせているものの、やはり人間である。とても動揺しやすい心境である。もし駄目だったら、と思ってもみる。たまらない。ふびんさが募る。我が子を信じ、ここまでやり抜いたのだ。間違いはない。合格に決まっていると思おう。そうだ、そうに違いない。ご先祖様にもお願いしてあるし、あの子もしっかり勉強してきたのだから、それしかない。そうと決めよう。素晴らしい合格の瞬間の喜びを、目の前に描いていよう。必ず勝利は来るのだ。とても頑張った孝ちゃんのもの。合格せずにおかまい。少しは心病んでいるだろうが、必勝を信じなさいと心の中であの子に言った。母として本当に我が子の跳び上がる姿が見たい。悲しむ顔なんか見たくない。絶対に信じたい。

顧みれば、高校3年間、一日も力を緩ませることなく懸命に上りきったと言えよう。冷たい朝、寒い日も、この日のために頑張った。どこまでも頑張りぬいたのだ。時には、私に心そのままに荒れに荒れるそんな時、私にはそんな姿の奥の息子の心悩む気持ち、体の中に入り込んで可哀そうにと思いやる。それが母としての本当の姿なのかと思う。いつの日か、この苦しきも春の晴天のごとく、両手をいっぱい広げて心の底から笑う、本当の笑いとなる日も来よう。信じてやりたい。息子が自分自身と闘ってきた、その長い日々の言葉で表せない闘志を、そして勝利の日を。私はたまらない。20日の合格発表の事を思うと。もし合格していたら、私はどんなでしょう。理性をしっかり持てるだろうか。自分が分からなくなるのではないか。でも私は我が子の為により明るい結末となるこ



とを、どこまでも信じてやまない。この日の来るのは遠い日と思っていたが、もう運命のその日は、そこまでやって来た。あと残すところ、6日になった。神よ、どうか守りたまえ。ただ神にすぎるのみとなった。あの子はやるだけやったのだ。母親を強く感じる日々である。母と子、こんなに強い強いきずなである事を確認する。あの子はとても可愛い子であった。小さい頃は色白で、丸い大きな目で、だれもが可愛い子と言ってくれた。私は誇りに思った。どんな子になるのか、楽しみで育てていた。体も健康で、すくすくと伸びていった。ありがたかった。人の心もよく分かる子であった。気の悪いことは言わなかった。私には出来すぎた子であった。大きくなって人並みに口答えもする、意見もよく言う息子になったけれど、でもそれはまあ許せるだろう。そのうち、世の中のいろいろな姿を見、だんだん人間も磨かれるだろう。

東京へ行く前に、どうしても今までお世話になった先生方に、ごあいさつに行かせなくては。中学時代の浅野哲市先生、高校の先生はもちろん、そして先生方の素晴らしいはなむけの言葉を頂きたいと思っている。息子の心の中にいつまでも残る素晴らしいお言葉を頂くことをお願いしておこう。これから巣立つ息子が正しく歩くように、温かいお言葉の頂けることを私は信じます。一日一日、とても長い。今日の日を少しでも明るい事のみを考えることにしよう。

3月15日 木曜日（晴風強い）

春一番というか、風がとても強い。でも晴れていい日である。私の胸の中は、まあすっきり晴れない。それは東大の発表がまだ済んでいないためである。あと5日、20日の日はだんだんと近づいてくるけれど、なかなかゆっくりして、じれったい。孝ちゃんの心の中を思う時、とてもやるせなく、可哀そうになる。早くその日が来ればと焦る。

3月16日 金曜日（晴）

今日は空はとても晴れて気持ちがいい。でも私の心はいまだ晴れることはない。苦しさが増してくる。今朝も5時前から目が覚めて眠れなかった。でも無理にでも寝ていた。

その方が良いと考えた。でも重くのしかかる思いが私を終始苦しめた。それは何をしても離れることなく付きまとう。20日が早く来ないかな。こんな思いで4日間もいたら、押しつぶされそうになる。でも、腹の底では大丈夫、大丈夫と信じて疑わなかったが、なぜか、その日の来るのが怖い。気が小さいのかな。素晴らしい栄光の日のはずだけど、とてもその日が怖い。なぜなのか。信じているつもりだけど、どこかすき間があるのか。やはり人間なのだ。目に見えぬ未来は、一寸先も分からない。自信がない。真っ暗である。ご先祖様に一生懸命お願いしておこう。お父さんや、兄さん二人にも、本当に私たちを守り、幸せへと導いて下さるでしょう。私は信じたい。幼い私をおいて死んだ父。私の可愛い息子をきっと守ってくれることでしょう。

今日のように澄み切った青い空とともに、息子の顔にも一点の曇りもない笑いが出るような、そんな日を夢みる。「良かった、合格した」と本当に腹の底から喜び、跳び上がる日もすぐそこに来ている。そうであることを祈る。孝ちゃん、あなたの心は苦しいでしょう。とても図り知れぬ苦しみがあることを、私は母ゆえに分かるのです。でも、じっと待つのです。もがいても仕方ありません。気を大きく持って、晴の日を待つのでう。必ず成就できます。あなたなら、今までこれほど頑張ってきたのだもの。それ以上やりようがないのです。じっと待ちましょう。お母さんと共に、その日が必ず明るい日であることを信じて、苦しくとも待つのです。あなたは大きくなった今、私にいつも口答えをします。意見めいたことを随分言います。だけど、人並みの言葉を言えるようになったことを、私は心の底では安心しています。生まれて二年間、口もきけず、心から案じた日もあった。小さい頃は女の子のようで、いつになったら男らしくなるのかと心配したものだった。でも今は、男すぎるくらい男しくなった。決して女くさくはない。今日の日も何事もなく済んでしまった。あと残りの日は短くなった。私は負けない。絶対に負けはしないと、強く心に言い聞かせた。そのせいで胃の調子が今日はいい。やはり神経を病むといけないなと思った。運命の日は、あと余すところ三日半。とても怖い気がする。けれど必ずやってくる。私にはとても鋭い刃物を前にしているようである。でも、どうしてもその前に立たねばならない。今となっては、何も防ぐことは出来ない。前向きに進もう。素晴らしい神の守りがあることを信じて一。

3月17日 土曜日（雨）

雨は昼間で待たずに降り出してしまった。今朝、孝ちゃんが言っていた。「昨夜、一晩中寝ずに合格体験記を書いとった」と。私は今からそんなまわしをしている孝ちゃんに、どうかスムーズにいて、その記が学校に出せるようにしてやりたいと思った。それが不合格体験記にでもなると、可哀そうである。どうか本当にそれが真実となることを祈る。きょうは17日。あと三日。私にとっても、本人はもちろん、我が家全体にとって何か大きな変動の日となるかもしれない。大切にしたい。その日を、記念すべき日を、男らしい日にしてやりたい。この一日一日がとてもじれったく感じてならない。なかなか進んでいかない気がする。もう明日が20日だったらなあと思う。とても、もどかしい。でも時間は押しても押しても進んでいくものではない。早く夜が来て、朝が来ればいい。私は仕事が終わると、たまらなく時計を見る。こんな気持ちは本当に体に毒である。

3月18日 日曜日（晴風強い）

もう明日一日を残すだけとなった。夜、食事のとき、茶柱が立った。何か良いことを暗示しているようである。私の茶碗の中であったが、それが20日の発表につながるものならば、それは本当に喜ばしいことである。そんな幸せが欲しい。親子共々の幸せが。晴れて笑える日がくるならば、どんなに嬉しいだろう。夢なのか、本当にそんなことは夢であろうか。でも、追いかけて、そんな夢を。苦しかった日もあったけれど、今まで頑張ってきて本当に良かったと思える日が来ることを。そしてこれからも子供たちと共に、正しい道を懸命に歩きたい。孝ちゃんの希望実現を確信して、人生の節としたい。

3月19日 月曜日（晴）

今朝、6時47分に起床。でも夜中1時、2時、3時、私の目は眠りに入らせてはくれなかった。なぜか頭のなかが冴えて、時間ばかり気になった。早く20日になればいい

と思った。全身に感じる神経が、嫌というほど眠らせなかった。そして、いろいろ思い出し涙ぐむ私であった。ああ、早く時よたっておくれ。苦しくのしかかるこの重みを、早く軽くしてくれ、と思った。明日は20日なのだ。今7時20分、もう今日も始まった。どういっても今日一日なのだ。神よ、素晴らしい栄光を下さい。孝ちゃんに笑顔が出ますように。明日の運命を私は恐ろしくもあり、楽しみでもある。

3月20日 火曜日（曇）

いよいよ今日は東大の合格発表の日。いま、6時55分。ご先祖様へのお祈りも済ませた。昨夜、孝ちゃんと口争いをする。自分の息子と思えないほど情けないことを言う。どうしてこんな子になったんだろうと嘆いてみる。でも、これも一つのいら立ちの表れであるかもしれない。でも、今日は心新たに出発しよう。最大の門出のために、いつかそんなことも悪いと思う日も来よう。私は我が子を信じよう。お父さん、兄さん、私を守って下さい。

昭和54年3月20日、午前9時47分発の新幹線に乗り込んだ。今日は待ちに待った日である。息子が今まで高校3年間、この日のために命懸けで突進し、全身で勉学の道にぶつかってきた結末の日である。あの素晴らしい東京大学、夢にまで見た憧れの大学合格発表の日である。空はどんより曇って、私たちの心の中を映しているかのように、とても心配な空である。今朝はお仏壇のお祈りも済ませ、万全を尽くしてきた。車中、複雑な思いを抱いて東京へと向かっている。車内放送で食堂車の案内が流れてくる。私には、ただ耳を通り抜けるだけのものである。そして、車掌さんが乗車券の確認にくる。私は新幹線に乗るのは15、6年ぶり。でも、やはり静かである。到着は11時47分だが、5分遅れているという。合格発表は午後だというのが、1時かな、2時かな。私は待ち遠しい。少しでも早いほうがいい。この運命の分かれ道を、とても待ちきれない。「お父さん、息子に幸せをやって下さい。勝利をやって。夜もろくろく寝ないで頑張った息子の一途な思いを叶えてやってください」。とても長かった高校3年間。そして生まれて18年。私にはそんな年月が今、どっとせきを切ったように頭に浮かんでくる。

生まれた時、男の子だった喜び、そして安産だった。本当に親孝行だった。そして、めきめき健康で育ってくれた。嬉しかった。毎日忙しいお店の中で、私は健康だけを祈って夜の来るのを待った。そして、この手に抱く時間の嬉しさ。いつも涙が出た。そして言葉の分からない我が子に話しかけた。「いい子になるんですよ。丈夫で親孝行ない子になってね」と、私は祈る思いで抱きしめた。可愛い、本当に子供は可愛い。けれど、一日のうち夜中ぐらいしか抱くことの出来ないことを悲しく思った。普通のサラリーマンの奥さんになりたかった日もあった。こんな年月を経て、今とうとうこんなにも大きく成長してくれた。本当に嬉しい。この喜びは計り知れない。でも今に来る運命の瞬間、どうか叶えてほしい。幸運を息子にやって欲しい。私にも、まだ少しでも幸せというものが残っているならば、それを全部あの子にやりたい。たとえあの子は私の気持ちが分からなくともいい。私はあの子を生んだ母親だもの。それでいい。このまま幸せをやりたい。でも、見事合格しても東京の空気は冷たいだろう。そんな空気に触れる時、あの子はだんだん大きくなっていくことでしょう。信じてやりたい。成功の段階を。いつか親の気持ちも分かる日が来よう。それでいい。先にたくさん愛情をやりたい。幼い頃の幸せ薄かった分、大きな愛の証をやりたい。それには、目的の大学に合格することである。とにかくそれが先決である。

列車はもう大分来たであろう。今はどこだろう。東大ってどんな学校だろう。どんな所に掲示してあるのだろう。さまざまな思いが胸に苦しく、重く私にのしかかる。とてもつらい時間である。二時間の列車の中がとても長く、じれったく感ずる。東京駅にようやくたどり着く。東京の地。けれど空も見えない。東京の街も、私には灰色にしか見えない。ただひたすら勝利を志して走ってきた息子の、いとしいまでの思いを叶えてやりたいだけの一筋の心であった。そして、そっと心の中でつぶやいた。「合格間違いない。孝ちゃん、お母さんも一緒に頑張ったんだもの」。それは幼子を見る心の叫びであった。電車に何度か乗り換えたようである。私はただ意識なく、息子の後をついていた。胸の重みをじっとかみしめて歩いた。そしてバスの中。やがて「東大正門前」と車内アナウンスがかかる。いよいよだ。それは本当に沈黙のひと時だった。言葉なく、足を運ぶ。少し向こうに大勢のどよめきが聞こえる。そして一人、二人、母親と連れ立ってニ

コニコとこちらに歩いてくる。「あっ、この人たちは合格したんだ」と、瞬間に思った。息子も同じだろう。そして恐る恐るその人の群れに入っていく。

息子は相変わらず早足であった。午後からといわれていた発表が、12時半程度であるが、もう始まっているのである。私は一瞬、胸がドキドキする思いであった。でも我慢した。そして群衆の中、私は必死に愛する我が子の名前を探した。小さな字であったが、でも大きく目を開いて、その字を追っていた。そして、とうとう我が子の名前を見つけた。カタカナの小さい字であった。でもそれは尊く、とても光る字であった。十八年このかた、呼び続けた懐かしい名前であった。「あっ、あった、あった。よかったね。孝ちゃん！」と、私は思わず声を出してしまった。そして、どこかへ見失った息子を探していた。間もなく気がつく、私の手は愛する息子の両手をしっかりと握りしめていた。「合格した」と、息子はただ一言口走った。そうだ、何も言わなくていい。何も言わなくても、お母さんにはあなたの心の中がよく分かるよ。嬉しいだろう。本当に良かった、と私はいつまでも心の中でつぶやいていた。

歩けなかった。嬉しさで、跳び上がる思いであった。涙があるれ出るのを、やっとの思いで我慢した。高校に入学してから3年間、真っしぐらに突っ走った学生生活。とても厳しく、すさまじいものであった。母の私でも泣かされるくらい、あなたは時間にも厳しく、あらゆるものに厳しかった。冷たいと思われるくらい、私には感じた。もう少し優しくなればと思った日が度々だった。でも今日のこの日のためにあなたは、母の私のことなんか考えなかったのであろう。ただ前向きに頑張るのみであった。それは本当に、人生への挑戦であったのであろう。そして今、自分に打ち勝ったのである。「ありがとうございます、ご先祖様。本当にありがとうございます。そしてお父さん、ありがとうございます」。私は亡き父の大きな愛を、肉親としての真実の愛を、これまでに感じたことはなかった。父の魂は永遠に生きて、私たち親子をどこまでも守ってくれたのである。父は幼い私を残して逝った。あの時の必死の我が子を思う親心を、今はっきりと証明してくれたのである。どんな願いも精いっぱい努力により叶えられたのであった。

「息子よ、あなた一人の力で合格したと思ってはいけないよ」と、心の中で言っていた。ありがとう、お父さん。やはり本当に素晴らしい父であった。これから歩く生活のなかに、先祖の守り、父の愛を忘れてはならない。いつまでも私は自分に強く言い聞か

せていた。今日のこの感激を、私は生涯忘れることはないでしょう。空は、まだ曇ってはいたが、でもとても素晴らしい空である。富士山もはっきり見えた。日本一の幸せな一日であった。

私の兄の幼いころの話を聞いてください。年兄さんの四歳のとき、お父さんが寄り合いで、子供のいない人から「一人、子供をくれないか」と言われ、お酒も入っていて、ちょっとうかつに「よし」と返事をしてしまったのです。大勢の子供はいますが、家へ帰ってお母さんにこんな約束をしてしまったことを伝えました。お父さんは布団の中で眠る子供を眺め、さて、どの子をやるか決めかね「この子も大事、この子もやれない」と困ってしまい、お母さんに言いました。「どうしよう、子供をやるか約束してしまっただし」。でもお母さんは、いったん男が決めたのだからと我慢しました。そしてとうとう年兄さんに決まりました。いよいよ連れて行く朝、本人はどこかに遊びにでも連れていってもらえるかのようにはしゃいで汽車に乗って行ったそうです。そして先方へ着き、父が「お利口しとれよ。またお父ちゃん来たるでな」と言うと、兄は「お父ちゃん、早く迎えに来てよ」と可愛い声で何度も叫んだそうです。父は後ろを振り向くことも出来ず、子供の声を聞きながらぐっと涙をのんだと言いました。そして家へ帰り、年兄さんの事を思い、母も寂しさをこらえました。月日がたち、風の噂に年兄さんは、とてもいじめられているらしく、たまらない気持ちだったとか。そしてある日、小さかった兄はどうして帰ったのか、夜遅く暗い布団の敷いた寢床にこっそり帰っていたのです。お母さんは変だなあと思い、子供の数を数えると一人多いのです。年兄さんでした。お母さんは「どうしてここにいるの」と聞くと、「お母ちゃん、お利口しとるで家において」と言ったそうです。お母さんはその時、きっと抱きしめてやりたかったに違いありません。遠い所から、どうして帰ったか。本当に可哀そうで、可哀そうでなりません。でもお父さんが決めた約束だから、男同士の約束は守らなければいけない。黙って逃げてきてはいけないのだと、また連れて行ったと言います。どんなにかこの子を自分の元で育ててやりたかったことでしょうか。でも、昔のこととてそんな甘い話にはならないのです。兄は連れられていき、またそれからどんどん辛い毎日が始まったそうです。近所の人々が「本当にひどい目に遭っているから、引き取ったほうがいいよ」と、人を通じて言われたとか。年兄さんは、それからでも簡単には帰れず、三年くらい居たらしいです。どんなにか実のお母さんの温もりが欲しかったでしょう。あまりのひどい評判に、父はとうとう連れ戻しに行きました。着ている物もここから着ていったままの短くなったカスリの着物で何も買ってもらえず、雑巾掛けをさせられたり、お使いをさせられたり、



叱られては毎日を過ごしていたといいます。兄の心の中に自分を生んでくれた実のお母さんの顔を浮かべ、陰で泣いていたことでしょう。よその人の冷たさに「お母ちゃん、お母ちゃん」と心で叫んでいたと思います。そして晴れて母の元へ帰ることができ、本当にお父さん、お母さんに孝行したそうです。嬉しかったのでしょう。「お母ちゃんの悪口を言ったら、兄さん絶対許さんぞ」と私たちに叱りました。私の幼い思い出の中に、今でもはっきり覚えています。そして一生懸命仕事をし、お金をもうけても、全部母に渡していました。それでも、お母さんのそばに居られるだけで嬉しかったのでしょう。そんな兄さんを私はかすかに覚えています。絶対の母の味方でした。どれほどよその生活が辛かったのかと思います。そして戦争、父は二ヶ月前他界。二年ほどして兄にも赤紙が来ました。「天皇陛下の御為に喜んで命を捧げます」とお宮で挨拶をしました。母はそんな兄を見ることは出来ず、兄の座った座布団のそばで、じっとうずくまっています。私は紙で作った日の丸の旗を両手で振り振り、駅まで送りました。大勢の町内の人達と一緒に兄は終始笑顔で歩いていきました。あれほど母を慕った兄も、とうとう戦場の人となりました。そんな母と子、いつも母は言っていました。「何が喜んで行くものか。年は、お母ちゃんとおにのこりに決まるとる」といつまでも幼いころを思い、悲しむ母でした。そして敗戦、ソ連で奴隷にされての死。戦士とは言え、これほど惨いことはありません。あんなに「お母ちゃん、お利口しとるで家において」と言った年兄さん。共産主義の「働かざる者、食うべからず」に悲しい死を迎えねばならなかったのです。極寒の北の地で重労働の中、風邪をひき、仕事が沢山できないという理由で盃一杯のご飯しかもらえず、栄養失調で死にました。兄は友人と固い約束をしたとか。「もし僕が死んだら、故郷の母にこうして死んだと本当のことを話して欲しい」。死の直前まで母を思って逝った兄の話です。そんな知らせを受け、母はぐっと唇をかんで涙をこらえました。茶碗に麦飯をつけ、タクアンをのせ、お茶をかけ、仏壇に供えて「年や、お前は麦飯のお茶漬け、たんとお食べたかったやろう。お母ちゃん、いっぱい食べさせてやりたかったなあ。親孝行ない子やになあ」と毎日手を合わせていました。母と子。切っても切れない固い絆に、私は少女ながら感動しました。親子と言う美しい貴い関係の中で、何か心揺さぶられる思いがしました。二十六歳、年兄さんは国の犠牲となったのです。親を思い、国を思い、自分の命すら投げ出した若い兄。そして全国の同じ戦争

犠牲者に、私は深々と頭を下げたい思いです。どんなにか死の直前「もっと生きたい」と願ったことでしょう。五十二年たった今も、私にはこの人たちの魂の叫びが聞こえます。